

富山経済同友会
教育問題委員会

課外授業講師派遣制度 活動レポート'23～'24

富山経済同友会は、平成12年3月に発表した提言「家庭教育を見なおす～子どもと共に親も学ぶ～」において、会員による具体的行動の一つとして、課外授業の講師を学校現場に派遣し、積極的に児童生徒や教師の方々と交流・連携することを提唱しています。

このことが、人生の先輩として生き方や考え方を伝えるとともに、親の仕事の一端を知る機会ともなるものと考えています。

当会の会員有志（主に企業経営者）によるボランティアの活動です。

令和5年度及び6年度の活動レポートを通じて、最新の活動状況をお知らせいたします。

富山経済同友会とは？

経済同友会は、経済3団体（経済同友会、日本経済団体連合会、日本商工会議所）の一つであり、全国各地に44の経済同友会があります。

富山経済同友会は、昭和36年に経済人としての職能的立場から日本経済の進歩と安定に寄与し、併せて会員相互の啓発、親睦を図ることを目的に設立され、現在約430名の経済人が参加しています。

各地の経済同友会と連携を図りながら、現実の企業経営に密着した知識と経験を駆使し、自由な研究討議を重ね、経済人として積極的に意見を公表するなど、地域社会の経済発展ひいては日本の経済発展に努めています。

《活動概要》

- 委員会活動（研究、提言など）
- 講演会・セミナー活動（時宜を得たテーマで講師を招き、講演会、セミナー等を開催）
- その他（会員定例会、諸団体との交流など）

富山経済同友会「課外授業講師派遣」制度のご案内

「課外授業講師派遣」制度とは ...

富山経済同友会の会員有志（主に企業経営者）を、学校の課外授業や特別授業のゲスト講師としてご紹介する制度です。

どんな話が聞けるの？

当活動に賛同した当会の会員が、それぞれの得意とする分野についてお話しします。

たとえば……人生の先輩としての体験談、働くことや学ぶことの意味、職業観、人生観、夢を持つことの大切さ、これからの社会で必要となる力 など

どんな所に来てもらえるの？

主に小学校（高学年）、中学校、高等学校の課外授業や特別授業の講師としてお役に立ちたいと考えています。

※これまでの派遣実績や授業の様子などは、当会のホームページに掲載しています。
派遣依頼書の様式をダウンロードすることもできます。



富山経済同友会ホームページ <https://www.doyukai.org/>

留意点は？

- ・当会の会員有志によるボランティアの活動です。謝礼などのお気遣いは一切ご無用に願います。
- ・日程の調整が困難な場合など、ご要望にお応えできない場合もありますので、実施希望日まで余裕をもってご連絡ください。
- ・複数の講師をご希望の場合、ご要望どおりの人数をお受けできない場合もございます。
また、お申し込み内容によっては、お引き受けできない場合もございますので、ご了承ください。

【お問合せ・お申し込み方法】

ご質問、お申し込みは、随時受け付けています。

（お申し込みから授業実施までの流れは、次頁をご参考になしてください。）

〔連絡先〕 富山経済同友会 事務局

〒 930-0856 富山市牛島新町 5-5 インテックビル 4 階

tel. 076-444-0660 / fax. 076-444-0661

e-mail : doyukai@po.hitwave.or.jp

「課外授業講師派遣」の流れ

富山経済同友会の行う「課外授業講師派遣」について、お申し込みから授業実施までの流れを紹介します。

1 お申し込みから調整まで

学 校 開催希望日の2～3カ月前までにお申し込みください。

事務局 ●学校の希望を踏まえ、講師登録会員の中から講師の調整を行います。
●講師が決まり次第、学校へ連絡します。

✎ 必要事項

○開催日時、会場、対象学年、人数、講演テーマなど、その他、ご要望があればお聞かせください。

2 事前準備

学 校 直接講師へ連絡し、授業内容、当日の流れ、資料や機材（パソコン、プロジェクター、スクリーンなど）の有無、集合時間など、事前に必要な打ち合わせを行ってください。

講 師 学校からの連絡を受け、当日の準備（資料作成など）を行います。

✎ お願い

○スケジュールその他、当初事務局に依頼された内容に変更が生じた場合は、速やかに講師および事務局にご連絡ください。

3 直前打ち合わせ(当日)

授業の前には、集合場所（校長室など）で、講師と進行の最終確認をお願いします。
校長先生など（学校側の責任者）から、学校や児童生徒の様子などもお伝えください。

✎ 授業の記録

○事務局職員が訪問し、記録のための写真撮影、録音、録画等をさせていただきます。授業の様子は、会報や活動レポートに掲載しますので、ご了承ください。

4 授業(当日)

各講師がそれぞれのスタイルで授業を実施します。

- 授業開始時に担当の先生から講師（会社名、役職など）をご紹介します。
- 終了時、児童生徒の代表から感想やお礼の言葉があればお伝えください。

5 授業終了後のお願い

授業終了後には、校長室などの控室にて、学校と講師双方で感想を述べ合う、意見交換の時間を設けてください。

✎ 感想文の提出

○授業終了後、児童生徒が感想文等を作成される場合は、講師（および事務局）にもご送付ください。
活動を続ける講師の励みになります。



富山経済同友会 課外授業講師派遣実績一覧【令和5年度～6年度】

(※敬称略。講師の役職等は派遣当時のもの)

令和5年度

No.	開催日	学 校・対 象	講 師	内 容
1	R5. 6. 7(水)	高岡第一高等学校 1・2学年(330名)	廣田 大輔 (十全化学(株) 取締役社長)	「これからの時代を生き抜く力」
2	R5. 6.20(水)	高岡市立芳野中学校 2学年(204名)	牧田 和樹 (株)牧田組 取締役社長	「働くこと」
3	R5. 7. 5(水)	砺波市立般若中学校 2学年(41名)	山野 昌道 (株)チューリップテレビ 取締役社長	「人生を幸せにする3つのコツ」
4	R5. 8. 4(金)	高岡市立牧野中学校 2学年(85名)	牧田 和樹 (株)牧田組 取締役社長	「働くこと」
5	R5. 8.25(金)	富山県立砺波高等学校 1学年	尾崎 浩二 (株)みずほ銀行 富山支店長	「銀行の仕事について」
			三原 克久 (三菱商事(株) 北陸支店長)	「商社の仕事とは」
6	R5. 9. 8(金)	富山県立入善高等学校 1学年(189名)	大橋 聡司 (大高建設(株) 取締役社長)	「働くこと、よりよく生きること」
			川合 紀子 (有)ステップアップ 代表取締役	「君たちはどう生きたいか」
			東出 悦子 (株)アイベック 代表取締役	「自由に楽しく幸せに生きる」
			益田 貴司 (ブリーズペイオペレーション3号(株) (ホテルグランテラス富山) 執行役)	「今後のホテル業と地域への貢献」
			若林 健嗣 (日本海電業(株) 代表取締役)	「デジタルツインから考える 『自分』を生きること」
7	R5. 9.15(金)	富山県立雄峰高等学校 3年次(50名)	牧田 和樹 (株)牧田組 取締役社長	「よりよく生きる」
8	R5. 9.23(土)	富山県立魚津高等学校 1学年(160名)	遊道 義則 (株)ユニオンランチ 取締役社長	「生きるということ～人生って何だろう～」
9	R5.11. 2(水)	魚津市立西部中学校 全学年(462名)、保護者42名	伊東 潤一郎 (アイティオ(株) 取締役社長)	「働く事と幸せに生きる事」
10	R5.11. 8(水)	片山学園中学校 3学年(68名)	稲葉 伸一 (株)三四五建築研究所 代表取締役	「楽しく生きる」
11	R5.11.24(金)	小矢部市立蟹谷中学校 全学年(89名)、保護者約20名	碓井 一平 (株)就活ラジオ 代表取締役	「どんな大人にも、社会にも 負けない人間を目指して」
12	R5.12.14(水)	富山県立富山高等支援学校 全学年(54名)	牧田 和樹 (株) MGG 取締役社長	「働くこと」
13	R5.12.20(水)	富山市立速星中学校 1学年(312名)	京田 憲明 (株)富山市民プラザ 代表取締役	「人生で大切なこと～豊かに生きる～」
14	R6. 2. 5(月)	富山大学教育学部附属小学校 5・6学年(138名)	牧田 和樹 (株) MGG 取締役社長	「よりよく生きる」

No.	開催日	学 校・対 象	講 師	内 容
15	R6. 2. 8(木)	高岡市立南星中学校 1学年(149名)	市森 友明 (NiX JAPAN ㈱ 取締役社長)	「学びの目的を知って、 学ぶ努力を楽しもう」

(15校 20名)

令和6年度

No.	開催日	学 校・対 象	講 師	内 容
1	R6. 5. 1(木)	富山県立新湊高等学校 1・2学年(76名)	山野 昌道 (㈱チューリップテレビ 取締役社長)	「自分の夢のを見つけ方」
2	R6. 6. 7(金)	砺波市立般若中学校 2学年(38名)	杉野 岳 (㈱スギノマシン 代表取締役副社長)	「働くということ～皆さんに 聞いて欲しい事・考えて欲しい事～」
3	R6. 6.13(木)	小矢部市立津沢小学校 6学年(40名)	種昂 哲 (㈱スタジオシュワリ 代表取締役)	「初めて会社を立ち上げるみなさんへ」
4	R6. 6.25(火)	高岡市立牧野中学校 2学年(91名)	牧田 和樹 (㈱MGG 取締役社長)	「働くこと」
5	R6. 8.23(金)	富山県立富山北部高等学校 1学年(218名)	市森 友明 (NiX JAPAN ㈱ 取締役社長)	「企業人にきく」
			大橋 聡司 (大高建設㈱ 取締役社長)	
			東澤 善樹 (とうざわ印刷工芸㈱ 取締役社長)	
			藤井 喜大 (㈱ネクストリー 代表取締役)	
6	R6. 8.27(火)	富山県立砺波高等学校 1学年	小山 輝行 (㈱みずほ銀行 富山支店長)	「高校1年での転機と決断」
			三原 克久 (三菱商事㈱ 北陸支店長)	「総合商社とは」
7	R6. 9.12(木)	富山県立雄峰高等学校 3年次(98名)	遊道 義則 (㈱ユニオンランチ 取締役社長)	「生きるということ～人生って何だろう～」
8	R6.11.15(金)	小矢部市立蟹谷中学校 全学年(93名)、保護者46名	片山 浩一 (片山商事㈱ 代表取締役)	「働くことの心構え」
9	R6.11.20(水)	舟橋村立舟橋中学校 1学年(35名)	高瀬 幸忠 (㈱スカイインテック 顧問)	「私の経験と働くということ」
10	R6.11.29(金)	富山市立速星中学校 1学年(293名)	福崎 秀樹 (㈱フクール 代表取締役)	「AI時代に生きるチカラを考える」
11	R7. 1.20(月)	黒部市立石田小学校 6学年(26名)	横山 栄一郎 (横山冷菓㈱ 代表取締役)	「アイス屋のおやじが伝えたいこと」
12	R7. 2.28(金)	砺波市立庄川中学校 3学年(34名)	碓井 一平 (㈱就活ラジオ 代表取締役)	「どんな社会にも負けない人生をめざして」

(12校 16名)

教育講演等

令和5年度

No.	開催日	団 体 等	講 師	内 容
1	R5. 5.17(木)	キャリア教育推進委員会	大橋 聡司 (大高建設(株) 取締役社長)	「メタバースで考える教育の未来」
2	R5. 6.29(木)	富山市中堅教諭等資質 向上研修(第1回)	東澤 善樹 (とうざわ印刷工芸(株) 取締役社長) 羽根 敬喜 (富美菊酒造(株) 代表取締役) 牧 真奈美 (株)クルサー 代表取締役) 遊道 義則 (株)ユニオンランチ 取締役社長)	「組織のリーダーとは」「若手の育成」
3	R5. 7. 3(月)	富山県商業教育振興会 定期総会講演会	稲葉 伸一 (株)三四五建築研究所 代表取締役)	「楽しく生きる」
4	R5. 7.27(木)	小・中・県立学校3年次 校長研修会	土屋 誠 (日本海ガス(株) 取締役社長)	「働き方改革誰が進める？」
5	R5. 8.22(木)	富山市中堅教諭等資質 向上研修(第2回)	伊東 潤一郎 (アイティオ(株) 取締役社長) 村上 宏康 (株)ワプラス 代表取締役) 茂住 昌子 (株) Snow Fox Japan 代表取締役) 山野 昌道 (株)チューリップテレビ 取締役社長)	「組織のリーダーとは」「若手の育成」
6	R5. 8.28(月)	県立学校校長研修会	稲田 祐治 (株)ミライノ交通観光ラボ 代表取締役)	「組織におけるこれからの働き方」
7	R5.11. 9(木)	富山県高等学校教頭会 研究発表会	大橋 聡司 (大高建設(株) 取締役社長)	「グローバル社会に必要な人財とは 《ローカルな会社社長の視点から》」
8	R5.11.22(木)	富山県中堅教諭等資質 向上研修	稲田 祐治 (株)ミライノ交通観光ラボ 代表取締役)	「ミドルリーダーとしての自覚、役割 ～働きやすい環境づくり～」

令和6年度

No.	開催日	団 体 等	講 師	内 容
1	R6. 6.25(木)	富山市中堅教諭等資質 向上研修(第1回)	荒井 洋平 (株)宝来社 代表取締役) 森 弘吉 (株)エムダイヤ 代表取締役)	「社会に学ぶ研修会」
2	R6. 7.29(月)	富山市中堅教諭等資質 向上研修(第2回)	益田 貴司 (ブリーズベイオペレーション3号(株) (ホテルグランテラス富山) 執行役) 吉村 直樹 (富山エフエム放送(株) 取締役社長)	「社会に学ぶ研修会」

No.	開催日	団 体 等	講 師	内 容
3	R6. 7.29(月)	小・中・県立学校3年次 校長研修会	高瀬 幸忠 (株)スカイインテック 顧問)	「企業経営と学校経営」
4	R6. 8.28(水)	中・高進路指導研修会	田村 元宏 (株)タムラ設計 代表取締役)	「未来を担う高校生に伝えたいこと」
5	R6.11. 6(水)	富山県中学校長会研究 大会	伊東 潤一郎 (アイティオ(株) 代表取締役社長)	「ものづくり企業の人づくりと組織づくり」
6	R6.11.20(水)	富山県中等教諭等資 質向上研修	稲田 祐治 (株)ミライノ交通観光ラボ 代表取締役)	「ミドルリーダーとしての自覚、役割 ～働きやすい環境づくり～」

参考 課外授業講師／実施件数及び講師派遣人数

年度	小学校	中学校	高校等	計	講師
H13		3	3	6	11
14		1	4	5	7
15		4	6	10	14
16		4	8	12	15
17	3	9	8	20	24
18	1	8	5	14	20
19	1	9	4	14	16
20		12	4	16	16
21	2	9	3	14	14
22	2	11	3	16	17
23	3	7	4	14	14
24	4	11	7	22	25

年度	小学校	中学校	高校等	計	講師
H25	4	8	7	19	26
26	1	6	2	9	10
27	2	12	3	17	24
28	2	9	3	14	14
29	1	14	1	16	21
30	1	11	2	14	31
R 1		9	5	14	18
R 2	1	9	5	15	19
R 3	2	15	8	25	49
R 4	3	7	7	17	31
R 5	1	8	6	15	20
R 6	2	6	4	12	16
計	36	202	112	350	472

課外授業講師派遣 活動レポート

令和5年度

第1回 高岡第一高等学校

6月7日(水)、廣田大輔氏(十全化学㈱取締役社長)が高岡第一高等学校にて1・2学年330名を前に「これからの時代を生き抜く力」と題して課外授業を行った。

廣田社長は冒頭、生徒たちに「皆さんは何のために働きますか？」と問いかけた。そして、働く動機には、直接的動機と間接的な動機があり、直接的動機である、楽しみ(仕事自体が楽しい)・意義(仕事による社会貢献価値を感じる)・可能性(仕事を通じて自らが成長できる)は、自身のパフォーマンスを向上させるが、間接的動機である感情的圧力・経済的圧力・惰性はパフォーマンスを下げてしまう。将来仕事を探すときには、自分が直接的動機を感じられる仕事は何かを考えてほしいと説いた。

続いて、会社の平均寿命は「23.8年」と紹介。会社を存続させるためには、社会の変化に合わせて会社が変わらなければならない、会社で働く人もそれに合わせて変化しなければならない。十全化学は73年続いているが、創

業時の事業は、現在は売上の1%にも満たず、変化することで存続してきたと語った。

そして、変わることは勇気がいるが、変わらないと社会のニーズに合わなくなる。変化のスピードが速い世の中では、絶対にこれが正しいというものは存在しない。

「周りがこうだから」ではなく「自分がどう思うか」が大切。周囲に流されず、自分の目で確かめてほしいと熱く語った。

最後に、「自分で自分にキャップをはめて、自らの限界値を自身で決めないでほしい。明確で具体的な目標を掲げ、その目標に向け、目の前のやるべきことを積み重ねていってほしい」とエールを送り講演を締めくくった。



第2回 高岡市立芳野中学校

6月20日(火)、牧田和樹氏(㈱牧田組取締役社長)が高岡市立芳野中学校にて2週間後に14歳の挑戦を控える2学年204名を前に「働くこと」と題して課外授業を行った。

牧田社長はまず、生徒にとって身近な「ラーメン屋」を例に、「店が提供する商品・サービス」と「客からの評価・代金」が釣り合うことが商売の大原則であると説明した。

続いて、会社と社員の間でも同じことが言え、「社員の労働」と「会社からの評価・給料」は釣り合っており、社員が働いて会社の役に立つことで、会社が客の役に立ち、客から会社が評価・代金を得て、それを基に会社が社員を評価し給料を与えるという連鎖になる。評価されて給料を得るということは、社員にそれに見合った力があるということだと述べた。

そして、客の役に立とうと努力することで成長することができる。働くことで手にすることができる一番大き

なものは「給料」ではなく「成長」であると熱く説いた。

次に、14歳の挑戦で感じてほしいこととして、「その会社が客にどのように役に立っているのか」「自分が役に立つためには何を身に付けなければならないか」「これまで学校で学んだことがどう役に立つか」を挙げたうえで、「国語力や計算力など学校で学ぶことが、社会に出て働く際の基礎になっていることを14歳の挑戦を通して実感してほしい」と述べた。

最後に、「将来自分の仕事を選ぶときには、職業・職種にこだわらないでほしい。“誰の・どのように役に立ちたいか”という目的を明確に持つことが大切で、この目的が明確であれば、手段(=職業)は無限にある」とアドバイスし授業を締めくくった。



第3回 砺波市立般若中学校

7月5日(水)、山野昌道氏(株チューリップテレビ取締役社長)が砺波市立般若中学校にて2学年41名を前に「人生を幸せにする3つのコツ」と題して課外授業を行った。

山野社長ははじめに、働くことの意味について、「社会はみんなで作るものであり、そこでは何らかの役割を果たさなければならない。これが働くということではないか」と話した。

その中で、自分に合う仕事や自分のやりたいことを見つけることは簡単なことではないとし、「夢は変化していくものであり、遅れてもよいから、自分が夢中になれるものをあせらず見つければよい」としたうえで、自分のやりたいことを見つけるためには、「考え続け、行動し続け、一日一日を一生懸命に生きることが重要」であり、行動し続けることで何か変化が生まれる」と説いた。

さらに、仕事のやりがいについて、「やりがいのある仕事は辛く、厳しいものであることが多い。苦勞のないところにやりがいはない」と強調し、「努力して何かを達成しようとするとその瞬間、苦勞そのものがやりがい

に変わる。そこに感動や感激が生まれる。やりがいとは自分で作り上げるものである」と語った。

また、人生を楽しむするためには、行動することが大切であるとし、「いろいろと悩むこともあるが、行動すれば思ってもみなかったことが起きる可能性がある。やってみないと分からない。面白いことは自分で探そう」と述べた。

最後に、人生を幸せにするコツとして、①迷ったら、やる、②人のせいにしない、③何をやってもうまくいくと考える、の3つを挙げ、「未来は一日一日の積み重ねであり、充実した未来のためには充実した一日一日を送ることが大切」だと語り、「人生は選択の連続、どちらが正しいかは一生分からない。選んだ方が正解と思えるよう、未来に向かって努力をしよう」とエールを送った。



第4回 高岡市立牧野中学校

8月4日(金)、牧田和樹氏(株牧田組取締役社長)が高岡市立牧野中学校にて、7月に14歳の挑戦を終えた2学年85名を前に「働くこと」と題して課外授業を行った。

牧田社長は、まず、「商売」とは、①売り手と買い手がいて、②商品とそれに見合う対価が支払われることで成り立つものであると説明した。そして、この関係は物を売買する場だけではなく、社会の様々な場で成立していると述べた。

さらに、この関係は会社と社員との間でも成立し、社員は会社に労働を提供し、会社はその対価として社員に給料を支払う。社員が会社の役に立つことで、結果的に顧客の役に立ち、顧客が会社に代金を支払い、その代金をもとに会社が社員に給料を支払うという大きな循環が生じているのだと述べた。

続けて、「社員は、会社の役に立つよう努力することで成長できる。人間は自身の成長(自己実現)を本能的に求めており、成長することでこの欲求が満たされ、生

きがいになる」「働くということは、ただお金を得るためではない。自分が成長するために働くのだ」と、働くことを通じて成長することの大切さを強調した。そして、「いま学校で学んでいることや経験していることは、何の役に立つのか疑問に思うかもしれないが、働いたときに必要な技量の基礎になる」と伝えた。

最後に、14歳の挑戦に向けて、「お店や会社などにおいて、お客さんのどんな役に立っているのか、そのためにはどんな技量が必要なのかを、しっかり学んできてほしい」と強調し、また、「仕事を探すうえで大切なのは、職業や職種を探すことではない。自分が誰のどんな役に立ちたいかをまず考えて欲しい。そのうえで、それを実現するための手段として職業や職種を考えてほしい」と熱く語り授業を締めくくった。



第5回 富山県立砺波高等学校

8月25日(金)、尾崎浩二氏(株みずほ銀行富山支店長)、三原克久氏(三菱商事株北陸支店長)が富山県立砺波高等学校で開催された職業理解講座「エキスパートに学ぶ」において、1学年の生徒を対象に課外授業を行った。

<尾崎 浩二 氏 (株みずほ銀行富山支店長)>

尾崎支店長は「銀行の仕事について」と題し、銀行業務を切り口に、今日の経済情勢や高校時代に身に付けておくべきなど、多岐にわたって講演を行った。

尾崎支店長は最初に、基本的な金融の役目から、みずほ銀行が全国や海外に展開する意義、尾崎支店長自身の業務まで、銀行の業務に関する様々な内容について説明した。中でも、都市銀行はお金の融通を通して、地方と全国、海外の人と人とを結びつける役割を担っているという説明は強く生徒の関心を引いた。

そして、将来の進路を考える上で高校時代に身に付けておくべき力として、海外との業務に必要な英語力、提案書を作成するための国語力、人と関わるためのコミュニケーション力などを挙げた。

また、銀行で働くうえでの苦勞として、「様々な業種のことを幅広く学ぶ必要があること、数年ごとに転勤があること」などを挙げつつ、これらの苦勞を「日本の産

業に幅広く触れることができる、転勤の都度新しい人間関係を築くことができる」など、別の切り口でポジティブに捉える姿勢は、生徒にとって大きな学びとなった。

講話後の質疑応答の時間には、生徒たちから多くの質問が寄せられた。「大きなお金を動かす上で各種経済動向の予測的中させるには？」という生徒の質問には、「専門家でも予測するのは難しい。銀行では、いろいろな情報を集めて、これが正しいだろうというストーリーを作るがなかなかその通りにもならないので、別のストーリーも想定し、不測の事態にすぐに対応できるように準備している。」と回答した。



<三原 克久 氏 三菱商事(株)北陸支店長>

三原支店長は「商社の仕事とは」と題し、「1. プロフィール紹介」「2. 商社の仕事とは？／三菱商事の業務概要」「3. 商社の仕事とは？／私の経験談」「4. 国際化するビジネス社会で役立つ力」という4つの柱のもとで講演した。

最初の商社の業務概要の説明では、商社が、従来の「会社と会社」の間に立ち、仲介手数料・金融手数料を得る：仲介（貿易）事業者から、「業界全体を見渡し、取引先・投資先の競争力強化・企業価値向上を支援する：総合事業会社」へと変化してきたこと、そして、今の商社は、常に社会の課題やニーズに向き合いながら変化し、それらを解決する形でビジネスを展開していることを具体的な事業を紹介しながら説明した。また、三菱商事は、三綱領（「所期奉公」「処事光明」「立業貿易」）というグループの共通理念のもとに社会的意義ある事業取組みを進めており、これから先も地域産業と地域社会に向き合い

ながら課題解決に貢献していきたいと力強く話した。

その後、豊富な海外勤務経験から、滞在各国の文化的特徴を、クイズを交えて紹介し、生徒たちは強く関心を持った。

最後に、各国における経験から得た知見をもとに「国際化するビジネス社会で役立つ力」として、「異文化への理解」「インテリジェンス（情報収集）につなげるためのコミュニケーション能力」などを挙げた。そして、「『想像』から『創造』」をキーワードとし「自由な発想を持ち、自らに限界を設けることなくチャレンジすることが大切だ」と強調、授業を締めくくった。



第6回 富山県立入善高等学校

9月8日(金)、富山県立入善高等学校において、1学年189名に対して、大橋聡司氏(大高建設(株)取締役社長)、川合紀子氏(㈲ステップアップ代表取締役)、東出悦子氏(㈱アイベック代表取締役)、益田貴司氏(ブリーズベリオペレーション3号(株)(ホテルグランテラス富山)執行役)、若林健嗣氏(日本海電業(株)代表取締役)の5氏が課外授業を行った。

<大橋 聡司 氏 大高建設(株)取締役社長>

大橋社長は「働くこと、よりよく生きること」と題し課外授業を行った。

大橋社長は冒頭、自社の事業を紹介するとともに、SDGs 達成に向けた会社運営や、高度外国人材の活用、DX 化・メタバース活用による働きやすい環境づくり、SNS を活用した情報発信など、自社の様々な取組み内容を紹介した。

次に、働くために身に付けておくべき力について説明した。将来多くの仕事がAIやロボットに取って代わられることが予測される中、協調性、誠実性、勤勉さ、熱意などの非認知能力、すなわち「人間力」が大切であり、特に、周りの人とコミュニケーションを取り周囲を巻き込んで協働することは人間にしかできないことだと強調した。さらに、「経験する力」も大切であると説き、失敗しても得るものが必ずあるので、失敗を恐れずにチャレンジし、どんどん失敗して失敗から学び、次に生かすことが大切だと語った。

続いて、「働く」は「傍（を）楽（にする）」ことだと紹介したうえで、「人は生きるためのお金を得る目的で働く。働くのは自分のためだが、同時に周り（顧客）のために働いて、顧客を満足させるような価値を提供することで結果として自分に良い形で返ってくる」と説明した。

最後に、よりよく生きるためのアドバイスとして、物事を多面的・長期的に考え、物事の表面ではなく根本・本質を探る、「多長根で物事を考える」べきだと語った。そして、「皆さんのこれからの人生には可能性が無限にある。自分自身で道を切り拓いてほしい」とエールを送り授業を締めくくった。



<川合 紀子 氏 ㈲ステップアップ代表取締役>

川合代表は、「君たちはどう生きたいか」と題し課外授業を行った。

冒頭、川合代表は「君たちはどう生きるか」と「君たちはどう生きたいか」の言葉の違いについて生徒に質問し、生徒の回答を確認したうえで、「将来どうなりたいか」「どんな社会になってほしいか」「日本はどのような未来に向かっているか」を問いかけた。そして、日本の現状を「労働力人口が減少する中、政府はSociety5.0を実現し、IoT、AI、ロボットを活用して生産性を劇的に押し上げようとしている。技術の急速な進歩と共に世の中が今まで以上に急速に変化し、将来が不確定で予測できないVUCAの時代に突入する。VUCAの時代は、想定外の出来事が次々と起こり、業界の概念を覆すサービスが登場し、今までの常識が非常識になる時代だ」と説明した。

続いて、VUCAの時代を生きるために求められる力として、「自らの頭で考える力」：AIにはできない、人間の感性・経験により創造的なアイデアを生み出す能力、「OODA（ウーダ）」：今起こっている課題を観察し

(Observe)、状況判断し(Orient)、意思決定し(Decide)、実行する(Act)、OODAのループを回すこと、などを紹介した。

そして、生徒たちが今から備えていくべき能力は、システム思考：複雑な関係性を理解する力、予測力：多様な未来を理解し評価する力、協働力：他者から学び他者と共感して問題を解決する力、批判的思考力：先入観にとらわれずに情報を客観的に評価し、論理的に考える力であると説いた。

最後に、「様々なことに興味を持ち、日々アンテナを張って情報収集し、自分なりに咀嚼し、自分の価値観、判断基準を持ってほしい。自発的に考え、行動するよう日々心掛けてほしい。」とアドバイスをした後、「『君たちはどう生きたいか』考えてみましょう」と投げかけて授業を終えた。



<東出 悦子 氏 ㈱アイパック代表取締役>

東出代表は、「自由に楽しく幸せに生きる」と題し課外授業を行った。

東出代表は、稲盛和夫氏の方程式「人生・仕事の結果＝考え方×熱意×能力」を紹介。熱意と能力は0から100までだが、考え方は-100から+100まであり、熱意や能力が高くて悪い考えを持っていると悪い方向に行ってしまう。良い考えを意識することが幸せに生きることにつながることを説明した。

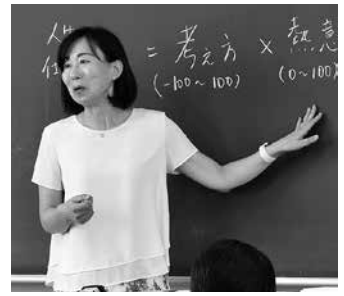
そして、熱意について、「興味のあることに取り組むときはエネルギーが湧いてきて大変な時も苦ではなくなる。目標を持ち一生懸命取り組むことで熱意が湧いてきて楽しくなる。例えば、勉強が楽しくなかったとしても『勉強すれば自分の目標に近づくことができる』と考え方をすることで熱意を高めることができる。熱意を高めるような考え方をして人生を楽しくしてほしい」と述べた。

能力については、「一人一人が大きな能力を持っているので、様々なことにチャレンジして自分の能力を探し

てほしい。『自分は勉強ができないから』などと自分の可能性に制限をかけないでほしい。能力に制限はなく、選択肢は無限にある。皆さんは自由だ」と熱く語った。

また、「世界で一番大切な人は誰？」と問いかけたうえで、「一番大切なのは自分自身。だが、自分だけが良いというのはダメ。自分を大切にすると共に人を大切に、思いやりを持ってほしい」と説いた。

最後に「マイナスな考えを持つと心が痛む。そういう気持ちで物事に取り組んでも良い結果にはならない。良い考えを持ち、目標に向かって楽しんで、自分の能力を自分で探す。これが幸せになるためにやらなければならないことだ」とアドバイスし授業を締めくくった。



<益田 貴司 氏 ブリーズベイオペレーション

3号㈱(ホテルグランテラス富山) 執行役>

益田執行役は、「今後のホテル業と地域への貢献」と題し課外授業を行った。

益田執行役は、自己紹介の後、自身が取り組むホテル再生業について説明した。コロナ禍や後継者不在などで運営が難しくなったホテルを経営して利益を確保することで、雇用を守ることができる。イベントを企画して地元の人に喜んでもらったり、客に「また来たい」と思ってもらえるようなおもてなしをして再び足を運んでもらうことも地域貢献につながることを語った。

また、今後のホテル業について、「コロナで大打撃を受けたが、既に訪日外国人がコロナ前の水準に戻りつつあり、今後も大阪万博などで訪日外国人が増える。富山にも魅力的な観光スポットが多くあるので、北陸新幹線の延伸も追い風となって多くの外国人が訪れるだろう。サービス業の求人が増えるので、皆さんの中にもサービス業に就く人がいるかもしれない」と述べた。

続いて、サービス業で働くうえで大切なことは、「おもてなしの心」、相手が思っていることを感じ取って、行動に移してあげることだと説明したうえで、生徒へのアドバイスとして、「人が困っていることに気付いたら思い切って行動に移してほしい」と自身の過去のエピソードを交えながら語った。

最後に、「高校時代は一生の友達に出会える貴重な時期。あっという間に過ぎてしまうので楽しんで充実した高校生活を送ってほしい。そして、気付いたことがあれば、小さなことでもいいから行動に移してほしい。その行動で相手や自分の人生を変えられるかもしれない」と強調し授業を締めくくった。



<若林 健嗣 氏 日本海電業㈱代表取締役>

若林代表は、「デジタルツインから考える『自分』を生きること」と題し課外授業を行った。

若林代表は冒頭、仮想空間に現実空間の情報を複製して再現する「デジタルツイン」の技術について、「今まで人間が蓄積してきた知識や技術の結晶であり、自動運転のAI学習や医療分野への活用など期待が大きい。デジタルツインが今後どのように社会に影響を及ぼしていくと、1人の非凡な天才が生み出したものではなく、世界中の様々な動機を持つ人々が関わり合って生まれたものだ」と覚えておいてほしい」と語った。

次に、コンピュータの進歩により計算技術がめまぐるしく進歩している時代だからこそ、「人間の感覚」が求められていると感覚の大切さを説いた。「感覚は、科学では説明できず、デジタルツインでも再現できない。感覚という生き物らしい部分はデジタル化で消えていくのではなく、今後ますます大事になる。感覚とはイメージ

する力。イメージする力は人間の原動力。人間の感覚と計算が相互に補い合うことで予想を超えた進歩が生まれ、デジタルツインのような高度な技術に繋がっていく」と述べた。

最後に、「感覚」の磨き方について、「感覚はデータのように積み上げて継承することはできず、人の一生の中で終わってしまう。感覚は人が生きる中で、いろいろな経験を通して磨くものであり、生きる速度に合わせてしか磨かれない。磨くことで自分の中にブレない「軸」が形成され、情報洪水の中でも流されずに『自分』を生かされるようになる。若いうちから同じ時代を生きる仲間と共に感覚を磨いてほしい」とアドバイスし、授業を終えた。



第7回 富山県立雄峰高等学校

9月15日(金)、牧田和樹氏(株)牧田組取締役社長)が富山県立雄峰高等学校にて3年次生約50名を前に「よりよく生きる」をテーマに課外授業を行った。

牧田社長ははじめに、「貨幣経済を生きるためにはお金が必要で、お金を得る第一歩が働くということだ」と述べた。そして、働き方には正規雇用と非正規雇用の2つがあると説明したうえで、「非正規雇用は年齢を重ねても給料が上がり難いが、正規雇用は会社が社員を教育するのでスキルが身につく、成長もでき、給料も上がる。若い時は正規と非正規の差が小さくても年齢を重ねるにつれ大きな差が生じる。これからの人生を考える際には、正規雇用の道を考えてほしい」と正規雇用を選択する重要性を強調した。

次に、社会に出て生きていくコツとして、自分以外の周りの人々を思いやることの大切さを説いたうえで、「社会

に出ると自分と他人との心のぶつかり合いが必ず生じる。これを解決することが社会で何事もスムーズにやっていくコツ。自分本位ではなく、自分の言動が他人にどう受け取られるかを考えて行動してほしい。そうすると必ず周りに人が集まり幸せに生きることができる」と語った。

続けて、就職先を考える生徒たちへ「仕事を選ぶとき、『職業』に捉われると選択肢が狭くなる。『誰のため、何の役に立ちたいか』を考えて目的を持つことで、職業の選択肢は無限に広がる」とアドバイスした。

最後に、「人生は一度しかない。限られた時間を有効に使い充実した人生を送ってほしい」と熱く語り授業を締めくくった。



第8回 富山県立魚津高等学校

9月23日(土)、遊道義則氏(株)ユニオンランチ取締役社長)が富山県立魚津高等学校にて、1学年160名を対象に「生きるということ～人生って何だろう～」と題して課外授業を行った。

遊道社長は、まず、「言葉」の不思議さ、大切さについて話した。「われわれは、『自分が言葉を統御している』と考えがちであるが、しかし、われわれが『言葉によって支配され統御されている』のである」という、イギリスの哲学者フランシス・ベーコンの言葉を引用し、意図的に言葉を自分で選んで発することが大事であるとした。「例えば、夢について、〇〇になる。〇〇する。と肯定的に言い切ることで、そうなる可能性を高める第一歩になり、自分自身を鼓舞することができる」と生徒たちに熱く語った。

次に、人生で大事なことを8つ挙げた。まず前半4つ、①人生は選択の連続であり、自分で決めること。②自分の体験を人と分かち合うこと。③まずは自分に対して、そして他人に対して正直であること。④自分で作っている制限に気付き、冒険・挑戦し、突破すること、を説明した。

さらに、まとめとして働くこと、生きることの意義について語った。新型コロナウイルスの拡散、ロシアのウクライナ侵攻など、近年の世界情勢を踏まえて、日本人の労働観の変化だけでなく、日本の国としての弱体化も懸念した。人の役に立たない仕事はないこと、地域に貢献する仕事も不可欠であると説いた。また、生きることに関連付けて、人生で大事なことの後半4つを挙げた。⑤やらない言い訳をしたり、先送りしたりせずに、とにかくやること。⑥全身全霊で取り組み、集中すること。⑦協力することで成長し、共に成果を作り、信頼関係を築くこと。⑧責任を取ること。である。

最後に、人生で大事なこと8つをもう一度振り返り、「他人や運任せにせず、自分の人生、自分が自分に何をしてあげられるか考え、大人になった時に、自分の人生について腹をくくるつもりでやってほしい」と訴えて、授業を終えた。



第9回 魚津市立西部中学校

11月2日(木)、伊東潤一郎氏(アイティオ(株)取締役社長)が魚津市立西部中学校にて、全校生徒462名と保護者42名を対象に「働く事と幸せに生きる事」と題して課外授業を行った。

伊東社長ははじめに、「なぜ勉強しないとダメなのか」と生徒に問いかけ、その答えとして「自分がやりたい職業を見つけたとき、勉強をしていないとその道に進む選択肢の幅が狭まる。勉強をする理由は、将来の職業選択の可能性を広げるためである」と話した。

そして、人生80年を1日24時間に例え、13～15歳の中学生は朝の4、5時にあたり、(20～60歳の時間にあたる)日中を一生懸命働くための準備の時間であると説いた。

また、会社で働くということは、人に喜んでもらうという顧客満足が大事であり、自分のための野心ではなく、志を持って世のため人のために頑張ることだと話した。

さらに、生きていくために必要な3つの力として、学力、体力(心も体も健康に)、人間力(優しさ・逞しさ)

を挙げ、その中でも人間力について、正しいことを正しいと言えることが大事であると述べた。

また、豊かな人間力をつくるためには、役を果たし、「気付く人間」にならねばならないと説き、「素直になる」「好奇心を持つ」「数多く経験する」ことが気付く人間になるために必要だと語った。

最後に、より豊かで幸せな人生を送るための教訓として「成功の反対は失敗ではなく何もしないこと＝必ず何かやってみる」「人生は与えたものが自分に返ってくる＝社会や人のためにしてあげる」「与えられた課題は先送りできるが、逃げ切ることはいできない＝必ずやる」とし、「経験をたくさんして、素敵な大人になるよう期待している」とエールを送り講演を締めくくった。



第10回 片山学園中学校

11月8日(木)、稲葉伸一氏(株三四五建築研究所代表取締役)が片山学園中学校にて、3学年68名を対象に「楽しく生きる」と題して課外授業を行った。

稲葉代表ははじめに、「人の印象は2秒で決まる。挨拶ができて50点、そのうえで時間を守れば+40点の90点になる」と挨拶することの大切さを語った。

続いて、自身が手掛けた設計案件を紹介しながら建築士の仕事について説明した。建築士は、頭の中にあるイメージを見える形にする仕事であり、図面を描くことは仕事のごく一部でしかない。人が何を求めているかを見つける力=コミュニケーション能力が求められる。資格は『足の裏についたご飯粒』であり、取らないと気持ち悪いが取ったからといって食べていけるわけではないと語った。

次に、生徒たちへのアドバイスとして、①毎日自己ベストを更新すること：毎日1%進歩すれば、1年後には $1.01^{365}=37.78$ になるが、毎日1%さばれば1年後には $0.99^{365}=0.03$ になってしまう。②チャレンジすること：

苦手なことにチャレンジすることで自分の中に新しい引き出しができる。引き出しが沢山あると何かあった時に自分の助けになる。③好奇心を持つこと：チャレンジするには好奇心が必要。好奇心を無くしたら死んでしまう。

④人生にゴールはない：どこに行ったら終わりということはなく、ずっと途中経過。流されないよう漕ぎ続けることが大事、と述べた。

最後に、「人生辛いことはたくさんあるが、今が楽しいと決める。誰に何を言われても、どんなにしんどいことがあっても今が楽しいと決めて前に進めばいい。人生には限りがある。なりたいたい自分に早くなればそこからいろいろなものを楽しむことができる。なりたいたいものになるには何をすべきかを戦略的に考えてほしい」と熱く語り、授業を締めくくった。



第11回 小矢部市立蟹谷中学校

11月24日(金)、碓井一平氏(株就活ラジオ代表取締役)が小矢部市立蟹谷中学校にて、全校生徒89名と2・3年生の保護者約20名を対象に「どんな大人にも、社会にも負けない人間を目指して」と題して課外授業を行った。

碓井代表ははじめに、住む場所や通う学校、与えられる教材など、子どもは自身に関することの大部分が親や周囲の環境によって決定され、自分で選ぶことができず、いざ社会に出て働こうとするとき、既に経験値に大きな差が生まれており、決して「世の中は平等ではない」と説明した。そして、そのうえで「自分で選べなかったとしても自分でやるしかない。ここで必要なのはチャレンジ精神。失敗なんてないというマインドを持ち、あれこれ考えずにチャレンジしてみる。チャレンジすることで経験値を積み重ねることができる。やることそのものに価値があるから失敗なんて存在しない。他人のものさしで失敗だと言われても、自分のものさしで『成功への途中経過』であるなら他人のことは気にする必要はない」と語った。

次に、碓井代表はコップの中のノミの話を紹介した。コップにノミを入れて蓋をすると、最初は蓋にぶつかる

まで高く飛んでいたノミが、次第に蓋にぶつからないように低く飛ぶようになり、蓋を外しても蓋の高さまでしか飛ばなくなる。しかし、そこに高く飛べる新しいノミを一匹入れると、他のノミたちもまた元のように高く飛ぶようになるというもの。

このノミの話になぞらえながら、「人間も自分に蓋をして、自分の限界を決めてしまいがちだが、環境を変えることで、これまで苦手だと思い込んでいたことが苦手じゃないと気付くかもしれないし、意識していなかったことが他人には出来ない特別なことかもしれない。環境が人を育てる。環境は自分で変えることができる。そのためには自分の意思で行動し、努力することが重要。周りが応援してくれなくても、味方がいる環境に飛び込んでいけばいい。世界には必ず応援してくれる仲間がどこかに存在する」と熱く語り、授業を締めくくった。



第12回 富山県立富山高等支援学校

12月14日(木)、牧田和樹氏(株MGG取締役社長)が富山県立富山高等支援学校にて、全校生徒54名を対象に「働くこと」と題して課外授業を行った。

牧田社長はまず、レストランを例に、貨幣経済における「もの」と「お金」の循環について説明した。レストランは料理を提供し、客は代金を支払うが、料理(もの)と代金(お金)の価値が釣り合って初めて、ものとお金の循環が生じる。代金に見合わない料理を提供するレストランではこの循環が生じず潰れてしまう。また、この循環はレストランの内部でも生じており、社員の労働とその対価としてレストランから支払われる給料が釣り合って循環している。より広い視点で見ると、社員がおいしい料理を提供することで、客がレストランに代金を支払い、代金を受け取ったレストランが社員に給料を支払うという大きな循環が成り立っている。つまりは、社員はレストランから給料をもらうために働くのではなく、

レストランに来る客においしい料理を提供するために働くのだと説いた。

そして、「漫然と仕事をやるのではなく、客の役に立つという目的を持って働くことが大切。目的を持つことでそれに向かって努力するようになり、努力することで自身の成長に繋がり、それが評価されて給料になって自分に返ってくる」と目的を持って働くことの大切さを強調し、授業を締めくくった。

授業の後の質疑の時間には、生徒から複数の質問が寄せられた。「上手な言葉遣いをするにはどうしたらよいか」という質問に対しては、「本を読むなどして自分の中でたくさんの言葉・表現のストックを持ち、それを自分の言葉として使えるように努力するとよい」とアドバイスした。



第13回 富山市立速星中学校

12月20日(水)、京田憲明氏(株)富山市民プラザ代表取締役)が富山市立速星中学校にて、1学年312名を対象に「人生で大切なこと～豊かに生きる～」と題して課外授業を行った。

京田代表ははじめに、自己紹介として自身の半生を振り返った。高校時代の環境庁新設をきっかけにこれからは環境の時代になると考え、公園緑地・造園学の道を志した。大学卒業後も造園に携わりたいと当時造園職を募集していた富山市に就職。ところが採用後に配属されたのは造園ではなく花や野菜の研究を行う部署であった。なぜこの配属なのかと悩んだが、植物が好きだったので仕事をしているうちに楽しくなると述べた。その後、5年目によりよく造園の仕事に携わるようになった。大変な仕事が多く、例えば茶庭を作る仕事は茶道の勉強をしなければならぬなど苦労したが、その分新しいことを学べて、面白い経験になったと語った。

次に、生徒たちに働くことの目的は何かと問いかけた。自身の経験から、収入を得ることも大事だが、働くことで人の役に立つ充実感や困難な仕事を成し遂げた達成感などが得られ「働くことは楽しい」と思えるよう

になったと述べた。

続いて、社会に出る時に必要な力である「社会人基礎力」(基礎学力・専門知識を活かす力)は人間性や基本的な生活習慣を土台としており、この土台を身に付けるには「豊かに生きる」ことが大切であると説いた。

そして、豊かに生きるために人生で大切なこととして、①話を聞くこと②やたら悩まないこと③誇りを持つこと④信頼関係を築くこと⑤チャレンジすること⑥夢を持つこと⑦内なる才能に気付くこと⑧頑張った数を数えること⑨辛い時こそ諦めないこと⑩超えられない壁はないと信じること⑪うまくいかなくていいと知ること、の11項目あり、頭文字を取ると「はやしちゅうがっこう」になると紹介した。

最後に、「今のこの一瞬は今しかない。11の大切なことを意識すると、次につながり豊かな人生を送る大人になれる」とアドバイスし授業を締めくくった。



第14回 富山大学教育学部附属小学校

2月5日(月)、牧田和樹氏(株)MGG取締役社長)が富山大学教育学部附属小学校にて、5・6学年138名を対象に「よりよく生きる」と題して課外授業を行った。

牧田社長ははじめに、児童たちに「カッコいい大人になるためには何が必要か?」と問いかけた。そして、「カッコよくなるためには、『こうなりたい』という目標・夢を持ち、自分自身を知り、自分にできることを伸ばし、できないことをできるように努力することで結果が出る」と述べた。

次に、努力して結果を出していく過程で備えておくべき重要な要素として「知性」「意欲」「人間性」の3つを紹介した。中でも、「人間性」について、「人間は、“人の間”と書くように、自分と自分以外の人との間で関係を築きながら生きる。人間は一人では生きていけない。知性と意欲だけをもって自分一人で夢を実現させることは難しいが、人間性を高めると、周りが自分を助けてく

れるようになり、夢の実現に近づくことができる」とその重要性を説いた。

最後に、「人には皆感情があり、感情がぶつかると、時にはけんかやいじめに繋がってしまうが、自分の感情を抑え相手を思いやる広い心を持ってほしい。学校の勉強も大事だが、それ以上に大事なのが心を育むこと。思いやりの心を持って、人とうまく関わりながら生きてほしい。それがよりよく生きることに繋がる」と熱く語り授業を締めくくった。

授業後の質疑の時間には児童たちから質問が殺到した。「夢を見つけるにはどうしたらよいか」という質問には、「今、夢が見つからなければ、目の前にあることに一生懸命に取り組んでほしい。目一杯頑張るとそこからヒントが生まれ、やりたいことが芽生えてくる」と答えた。



第15回 高岡市立南星中学校

2月8日(木)、市森友明氏(NIX JAPAN(株)取締役社長)が高岡市立南星中学校にて、1学年149名を対象に「学びの目的を知って、学ぶ努力を楽しもう」と題して課外授業を行った。

市森社長は冒頭、自社の事業を紹介したうえで、仕事のあるべき姿について、社会価値と経済価値の両方を生み出すのが「仕事」であり「働く」ことであると説いた。

次に、仕事と学習の関係について「例えば土木設計の仕事には物理の知識が求められるなど、社会貢献する仕事には技術や技能が必要とされ、それを身につける基礎が学習である。また、中学生の今は、将来どんな仕事に就くかイメージできなくても、よく学習することで、将来をイメージでき、仕事を選ぶ際に選択肢が広がる」と説明し、学習することの大切さを説いた。

続けて、努力量と成果の関係を描いた成長曲線を示しながら、「学習や努力はしんどいもので、最初は努力が成果となって表れるが、次第に努力をしても成果が出ない“停滞期”が訪れる。これが“成長の壁”となって立

ちはだかり、ここで諦めてしまう人が多い。だが、成長の壁を超える前に諦めてしまうと今までの努力やかけてきた時間が無駄になってしまう。成長の壁の前後では、努力量の差は小さいが、成長度は大きく異なる。努力を続けると必ずどこかでブレイクスルーを起こすことができる」と述べたうえで、「この成長曲線を理解しておけば、成長の実感がなくても努力することができる。伸び悩んで苦しい時にはこの成長曲線を思い描き、諦めずに努力しよう」とアドバイスした。

最後に、「努力は幸福を手に入れる手段ではなく、努力そのものが幸福を与えてくれる。人間は生来の能力に差はあるが、その差は努力で埋められる。皆さんの将来は希望に満ちている」とエールを送り授業を締めくくった。



第1回 富山県立新湊高等学校

5月1日(水)、山野昌道氏(株)チューリップテレビ取締役社長)が富山県立新湊高等学校にて商業科1・2学年76名を前に「自分の夢の見つけ方」と題して課外授業を行った。

山野社長ははじめに、「なぜ働かなければならないのか」を生徒に問いかけ、「社会はみんなで作るものであり、働くということは社会を作る一員としてそれぞれの役割を担うことである」と話した。

将来の夢を見つけるためには、「考え続け、行動し続けることが大事」であり、「一日一日を一生懸命生きる、日々の積み重ねが将来の自分をつくる」と説いた。そして、成功するには努力が必要であるとした上で、「やりがい」について、「苦勞のないところにやりがいはなく、辛く厳しい体験が感動に繋がる。苦勞や努力して達成した時にやりがいや感動になる。その『やりがい』は与えられるものではなく自分でつくるものである」と語った。

また、充実した人生を送るためには、行動することが

大切であるとし、「一歩踏み出すことで変化が起き新しい景色が見える。面白いことは自分でつくりたいといけな」と述べた。そして、人生を幸せにするコツとして、「迷ったらやる」「人のせいにしない」「前向きに考える」の3つを紹介した。

最後に、自分の夢を見つけるには、「知識を得る」「大人に聞く」「やってみる」「目の前のことに真剣に取り組む」ことが大切であるとし、「人生は選択の連続で迷うことがあると思うが、どちらを選んだ方が正しかったかは一生分らない。大事なことはこれを選んで良かったと思えるようにその後の行動で正解を作っていくことである」と強調して授業を締めくくった。



第2回 砺波市立般若中学校

6月7日(金)、杉野岳氏(株)スギノマシン代表取締役副社長)が砺波市立般若中学校にて2学年38名を前に「働くということ～皆さんに聞いて欲しい事・考えて欲しい事～」と題して課外授業を行った。

杉野副社長ははじめに、いろいろなことを自分で考えること、聞いたことを考えて発言することの大切さを説き、講義時間の半分を質疑応答に充ててリアルタイムの対話を求めた。

働くことについて、仕事とは世の中に必要とされなければ存在し得えないとしたうえで、「仕事に貴賤はなく、どんな仕事でも等しく尊い。また、『社会の歯車＝社会に欠かせない存在』であり、自分や当社が社会の歯車であることを誇りに思う」と語った。

また、「脱階層認識」として、「大企業＞中小企業、都市部＞地方、大学＞高専、普通科高校＞専門高校というような上下優劣の偏見を取り払って、自分がやりたいこと、得意なことは何か、それに対してどのような仕事が

あるのか、どのような勉強をする必要があるのか、という見方でこれからの人生の選択をしてほしい」と呼びかけた。

後半は、生徒から寄せられた質問にざっくりと答えた。「仕事と授業はどちらが楽しいか」の問いには、「授業は答えを知っている人がいる。仕事は答えを知っている人はおらず、問題さえ自分で見つけなければならない。出した解がベストだったのかも分からないが、その分責任感ややりがい、達成感は授業の比ではない」と答えた。また、仕事と趣味の両立について、自身の趣味である自転車の話を交えながら「時間の使い方の工夫により、仕事と趣味は両立できる」などと回答した。

最後に、「皆さんには無限の未来が広がっている。ぜひがんばってほしい」とエールを送って締めくくった。



第3回 小矢部市立津沢小学校

6月13日(木)、種島哲氏(株)スタジオシュワリ代表取締役)が小矢部市立津沢小学校にて6学年40名を前に「初めて会社を立ち上げるみなさんへ」と題して課外授業を行った。

種島代表は、キッズショップの立ち上げを控えた児童たちに、企業理念、コンセプトの大切さとクリエイティブに発想することの大切さについてグループワークを交えて説いた。

まず、なぜ企業理念・コンセプトが必要かということについて、会社は1人ではできないとしたうえで、「コンセプトがあることにより、チームで同じ方向を向いて仕事をするができる。それが一貫性をもった世界観やブランドをつくることに繋がる」と語った。そして、コンセプトを作るためには、①どんな物売りたいか、②どんな人に買ってほしいか、③買った人にどんな気持ちになってもらいたいかを考えるとよいと助言した。

ただし、それだけではありきたりなものになるとして、

「他との差別化をして一歩先に行くには、クリエイティブな発想が必要である」と語った。クリエイティブな発想をするために自身が実践していることとして、①何でもよく調べること、②人の話をよく聞き素直に受け止めること、③恥ずかしがらず、失敗を恐れずに口に出すこと、行動すること、④考えながら日常を過ごすこと、⑤他の分野にも興味をもつことの5つを紹介した。

最後に、「クリエイティブな発想にできることは、今世の中になく新しい価値観を生み出すこと、今この場所で、この人しかできないことができることである」と語り、これからキッズショップを立ち上げる児童にエールを送り締めくくった。



第4回 高岡市立牧野中学校

6月25日(火)、牧田和樹氏(株MGG取締役社長)が高岡市立牧野中学校にて2学年91名を前に「働くこと」と題して課外授業を行った。

牧田社長は、社会のしくみとして、顧客と会社と社員の関係について、レストランを例に説明した。まず、顧客と会社の関係について、「レストラン(会社)は料理(商品)を提供し、顧客が代金を支払う。代金に見合わない料理を提供するなど、料理やサービスと代金が釣り合っていない場合、レストランの商売は成立しない。釣り合うためには、顧客に満足してもらうような商品を提供する必要がある」と述べた。

続けて、会社と社員の関係について、「会社は顧客の役に立たなければならないが、会社が顧客の役に立つことは、そもそも会社にいる社員が顧客を満足させる仕事をしなければならず、そのためには技量(力)を身につけることが必要で、顧客が支払った代金の中から、その技量に応じて給料(報酬)を得ることになる」と語った。

そして、「いま学校で学んでいることや経験していることは、何の役に立つのか疑問に思うかもしれないが、働いたときに必要な技量の基礎になる」と繰り返し伝えた。

最後に、14歳の挑戦に向けて、「お店や会社などにおいて、お客さんのどんな役に立っているのか、そのためにはどんな技量が必要なのかを、しっかり学んできてほしい」と強調し授業を締めくくった。

質疑の時間には、多数の生徒が質問した。「技量は勉強でしか身につけられないのか」という質問に対しては、「技量は知識×経験であり、知識と経験の両方が必須だが、中学生のときは知識を蓄えることが大切」とし、「小学校、中学校の勉強の積み重ねが知識の土台となるので、頑張してほしい」と生徒にエールを送った。



第5回 富山県立富山北部高等学校

令和6年8月23日(金)、市森友明氏(NiX JAPAN(株)取締役社長)、大橋聡司氏(大高建設(株)取締役社長)、東澤善樹氏(とうざわ印刷工芸(株)取締役社長)、藤井喜大氏(株ネクストリー代表取締役)の4氏が富山県立富山北部高等学校で開催された「富北キャリアデザイン講座<企業人にきく>」において、1学年218名に対し課外授業を行った。

市森社長は普通科の生徒に対し、努力をテーマに授業を行った。

市森社長は、仕事、学習、努力の重要性という3つの柱を軸に、将来のキャリア形成に向けて、今何をすべきかという明確なメッセージを、自身の豊富な実体験をもとに生徒の目線に立てて発信した。

まず、仕事について、「仕事は単なる収入源ではなく、社会に価値を提供し、自己実現を満たすものである」とし、社会課題解決ビジネスの事例を挙げ、企業、行政、地域が連携することで、より良い社会を築けることを示唆した。

次に、学習について、「例えば、橋の設計には物理の知識が、プログラミングや金融保険商品の設計には数学の知識が、ホテルのフロント業務には英語力が求められるように、社会貢献する仕事には技術や技能が必ず求められる。それを身に着けるのが『学習』である」と言及し、様々な分野の仕事で、学校で学んだ知識がどのように活かされているかを説いた。

続いて、努力について、「成長の壁」の存在を認めつつ、それを乗り越えることの重要性を強調し、「仕事にも学

習にも成長の壁は存在し、壁に届くまで成長の実感の無き努力が続く。努力の量と成果は必ずしも比例しないが、この期間を乗り切れば、ブレイクスルーは突然訪れる」ということを生徒に熱く伝えた。

最後に、「社会価値と経済価値の両立を生み出す代表的行為が仕事であり働くことである。

そして、君たちには成長の壁を乗り越える可能性を強く信じて努力し続け、自身のやりたいことを実現し、輝かしい未来を掴み取ってもらいたい」と、今努力することが大切であり、成長の壁を乗り越える勇気を持つこと、そして社会に貢献でき自身の利益を追求できる仕事を目指すことを強く呼びかけて講演を締めくくった。



市森 友明 氏

大橋社長はくすりバイオ科の生徒に対し、働くことの意義やよりよく生きることについて授業を行った。

大橋社長は冒頭、自身が務める役職を紹介し、それらを引き受け信頼に答えることが自分の成長につながっていると述べた。また、ICTを活用した誰でも働ける職場環境作りをはじめとした自社の働き方改革の取り組みを紹介し、多様な人と認め合い、誰でも活躍できる会社は成長していくと語った。事業で失敗した経験を交え、「失敗は貴重な経験であり、失敗をそのまま終わらせるのではなく、なぜ失敗したのか、どうすればいいのかを考えることが成功につながる」と説いた。

そして、AIの発達によって近い将来多くの職業がなくなる可能性があり、これからの時代、コミュニケーション力や協調性、誠実性、勤勉さ、自制心、忍耐力等の非認知能力を磨き、人間にしかできない職業を選ぶ必要があると説いた。

続いて、働くことの意味は「働く」の漢字の成り立ちから、人が動くことであり、(当て字で)「傍(を)楽(にする)」であると語った。周りの人を楽にするために動き、それ

が社会の人から喜ばれ、社会のために何をするかにつながると訴えかけた。

今後、①経験する力、②経験から学ぶ力、③経験を次に生かす力、④人々と協働する力、⑤現実に向き合う力を磨き、社会に出て困難に直面した時にはこれらを繰り返し述べてきた。

最後に、よりよく生きるために、物事を多面的・長期的に考え、根本・本質を探る「多・長・根」を意識すべきとアドバイスし、「いろんなことに挑戦し、失敗を繰り返しながらも人と協調し、感謝を忘れず、道を切り開いてほしい」とエールを送り講演を締めくくった。



大橋 聡司 氏

東澤社長は情報デザイン科の生徒に対し、社会で働く意義について授業を行った。

東澤社長は冒頭、「今、どんな気持ちで勉強しているか」と問いかけた。自社の製品開発では社員のアイデアを積極的に取り入れるようにしており、その理由として「やらないよりやってみよう」という気持ちは何よりも大切であると語った。そして、「どうやったら、さらに楽しくできるか」を考えて仕事をしていると述べ、「専門的・基礎的学習もどうやったら楽しくできるかを考えてやってみてほしい」と語りかけた。加えて、自社の製品を見せながら、「自分ならもっといいものにできる！どうやったらよりいいものになるだろうと考え、周りと共有してほしい」と述べ、自分が何をできる人物かを周囲の人に知ってもらうことの大切さを説いた。

次に、自身がドイツ留学していた際、日本の文学や歴史など学校で学ぶ内容をよく聞かれた経験を踏まえ、「学校の勉強をしっかりやっておけばよかった」と感じたと述べた。そして、デザイン会社でのパンフレット制作を

例に「学校の勉強は専門分野だけではなく1つ1つを大切にほしい。それが自分を高めることに繋がる」と説き、さらに「どんな会社でも学校で学んだこと、自分で学んだことは強みになる。自分の強みを周りに発信することでチームでも強くなる」と学ぶことの意義を語った。

最後に、社会で働く意義として「仕事をするうえでは相手を信頼すること、誰かのために何かをしたい、誰かを助けたいという気持ちが大切。この気持ちをベースに働くことで自社も他社も繁盛し、さらに社会もよくなるかもしれないという気持ちで働いてほしい」とアドバイスし講演を締めくくった。



東澤 善樹 氏

藤井代表は普通科体育コースの生徒に対し「成功を掴む方法」と題し授業を行った。

藤井代表ははじめに、「成功とは何か」を生徒に問いかけた。年齢や身の回りの状況によって、成功の定義は変わって当然としたうえで、自身の考える成功の定義は「自分の思い描く未来をつかみ取ること」と紹介した。また、自身が「愛」を「手間を惜しまないこと」と定義していることを例に、定義付けることによりあらゆるものが明確になり、具体的な行動につながると説いた。

そして、成功を掴むには「強み」を活かすことが重要と語った。会社でうまくいかなかった経験が「強み」の大切さを意識するきっかけとなったことを踏まえ、「自分の強みを理解し、周りの人と互いに高め合ってほしい」と呼びかけた。

次に、強みを見つける具体的な方法として、自分の好きなことを動詞にしてT (Thinking) C (Communication) L (Leadership) の3つに分類する“TCL分析”、“信頼できる人に聞く”の2つの方法を挙げた。また、強みの

活かし方として、自分の強みを最大限に活かす戦略を考えることが成功につながるという“ランチェスター戦略”を紹介した。

最後に、「答えは自分の中にある。他者と比較して出てくるものではない」と述べ、自分自身の強みをよく分析することの大切さを説いた。また、高校生の強みとして、①若さ、②部活動などの打ち込むべきものがあることを挙げ、「若さにはお金で買えない価値があり、何かをやりきったと思える経験は社会に出た時に必ず活かされる。皆さんが思い描く素晴らしい人生を歩んでほしい」とエールを送り、講演を締めくくった。



藤井 喜大 氏

第6回 富山県立砺波高等学校

令和6年8月27日(火)、小山輝行氏(株)みずほ銀行富山支店長)、三原克久氏(三菱商事(株)北陸支店長)が富山県立砺波高等学校で開催された職業理解講座「エキスパートに学ぶ」において、1学年の生徒を対象に課外授業を行った。

小山支店長は「高校1年での転機と決断」と題して課外授業を行った。

はじめに、自身の高校時代について、国語や英語が苦手であったことから文系に進むことを躊躇していたところ「社会のことに興味があるなら迷わず文系に行け」とアドバイスを受け、文系進学を決断したエピソードを披露し、自分の心にしっかり向き合い、興味を持てるものを探り、自分の持ち味は何なのか考えることを大切にしたいと語り、進路や勉強、趣味などに活かしてほしいと語った。

次に、銀行の三大業務(預金、貸出、為替)についてわかりやすく説明し、メガバンクの特徴として、海外に仕事の幅を広げられること、全国に支店があり圧倒的な情報ネットワーク網があることを紹介した。一方で、銀行間で基本的なサービスに大きな差がないため、企業への営業や提案などを通じた顧客との関係づくりが重要であると述べた。また、企業の経営戦略や事業構造等のコンサルティング業務を通じて、銀行が投資や融資を生み出

そうとしている点について生徒たちは新鮮に感じていた。

自身は就職活動において銀行を第一志望としていなかったものの、入行してからはさまざまな顧客・業界関係者との関わりの中で、業種を問わず企業の仕組みを知ることができる点に仕事の魅力を感じるようになったと語った。

最後に、「せっかくの人生、ぜひ自分の心に正直であってほしい。自分の希望がかなわなかったときも自分の置かれた環境や境遇をどう活かすかという思考を持つことで、人生は豊かになる」と、文理選択や進路選択を意識する段階にある生徒にエールを送り講演を締めくくった。



小山 輝行 氏

三原支店長は「総合商社とは」と題し、課外授業を行った。

はじめに、明治から昭和初期にかけて日本は海外の先進的なものを取り入れて産業化に努めるとともに、国内で付加価値のあるものや新しいものを創造して海外に輸出することで国力を蓄えてきた背景を紹介し、商社はその役割を担っていたことを説明した。時代の変化とともに、「仲介（貿易）事業者」からそれぞれの産業分野でプレイヤーとして事業に携わる「総合事業会社」へ変化してきたこと、そして、今の商社が常に社会の課題やニーズに向き合いながら変化し、それらを解決する形でビジネスを展開していることを具体的な事業を紹介しながら語った。また、「所期奉公」「処事光明」「立業貿易」というグループの共通理念をもとに社会的意義のある取り組みを行っており、これから先も世界中で地域産業と地域社会に向き合いながらE XやD Xを推進し、課題解決に貢献していきたいと力強く話した。「社会に貢献して

いると実感を持てる達成感」がこの仕事のやりがいであると語った。

その後、豊富な海外勤務経験から、滞在各国の文化的特徴についてクイズを交えて紹介し、価値観の多様性に触れ、生徒は強く関心を持った。

最後に、各国での経験から得た知見をもとに「国際化するビジネス社会で役立つ力」として、「異文化への理解と共存」「契約書をベースにした交渉と論理的思考力」「専門分野以外からの情報収集」などを挙げた。そして「自分で自分に制限をかけず、自由な発想で自由に探求し、それに向かって努力・創造していくことが大切である」とアドバイスし講演を締めくくった。



三原 克久 氏

第7回 富山県立雄峰高等学校

令和6年9月12日(木)、遊道義則氏(株)ユニオンランチ取締役社長)が富山県立雄峰高等学校にて3年次98名の生徒を対象に「生きるということ～人生って何だろう～」と題して課外授業を行った。

遊道社長ははじめに、「言葉」の不思議さ・大切さについて触れ、人間は自分の言葉を統御しているつもりで、実は言葉に統御されているのだと説明し、例えば、将来の夢を話すときに「～になれたら」や「～になりたい」ではなく、「～になる」と言い切るなど、意図的に言葉を選んで発することが大切であると説いた。

次に、人生で大事なこととして、①人生は選択の連続であり、自分で決めること、②自分の体験を人と分かち合うこと、③自分・他人に対して正直であること、④自分の可能性を自分で否定せず、冒険・挑戦すること、⑤やらない言い訳ばかりしていると、せっかくの機会を逃すことになるので、とにかくやること、⑥全身全霊で取り組み、集中すること、⑦協力することで成長し、共に

成果を作り、信頼関係を築くこと、⑧責任を取ることの8つを紹介した。無責任な人が増えているが、「怒る」と「叱る」は別物で、叱ってもらうということは「直さなきゃ」と気付くチャンスであり、叱ってくれる人は宝であると述べた。

さらに、働くこと、生きることの意義について、「誰かの役に立つことが働くということであり、誰かが一生懸命働いてくれているからこそ自分も生活することができる。だからこそ自分も頑張ることができる」と語った。

最後に、「自分の人生は誰も何もしてくれない。腹をくくって、自分の人生を生きてほしい。高校生活を楽しんでください」と激励し授業を終えた。



遊道 義則 氏

第8回 小矢部市立蟹谷中学校

11月15日(金)、片山浩一氏(片山商事(株)代表取締役)が小矢部市立蟹谷中学校で生徒93名、保護者46名に対し「働くことの心構え」と題して課外授業を行った。

片山代表は、幼いころから親戚の工務店の業務の手伝いをした経験が現在も自分自身の力になっていることや、中学時代に沖縄音楽を聴いて思い立ち、沖縄に一人旅をした経験について語り、「いろいろなことに飛び込んでいく、チャレンジ精神をもってほしい」と説いた。

さらに、「高地で育てられたイランのバラはよい香りがする。過酷な環境で育ったバラこそ、品質がよい。私たち人間も、苦勞することで成長する」という現地の人々の話を例に、苦勞することもやり遂げることで、自分の成長につながるということを語った。

また、美容の仕事で使用するために、パキスタンの透明な岩塩を手に入れる過程で、様々な人々との関わりが生まれた経験について話し、「真剣に物事を追求している人には、追

求している人が集まり、たくさんのつながりができる。よいものにこだわり、よりよいものを追求していくことはとても大切である」と述べた。そして、「仕事をするときは、人と人との関わりが大切で、相手に理解してもらえるよう相手のことをよく知り、誠心誠意自分の思いを伝えれば、きっと相手に届く」と話した。

最後に、「学校の勉強が得意ではなかったとしても、集中力が高く、好きなことを追求して成果を上げている人たちがどの業界にもいる。これから大きく変化していく社会を生きるために、柔軟に対応できる力も育みながら、好きなことを続けてほしい」と強調して講演を締めくくった。



片山 浩一 氏

第9回 舟橋村立舟橋中学校

11月20日(木)、高瀬幸忠氏(株)スカイインテック顧問)が舟橋村立舟橋中学校で1学年35名に対し「私の経験と働くということ」と題して課外授業を行った。

高瀬顧問は、「就職するまで」と「就職してから」の2つのステージで経験・見聞したことをクイズも交えて話した。

幼少期は親の転勤で国内を転々とし、各地で過ごした体験や文化、自然の美しさ等に触れる機会に恵まれたことや、親のアメリカ転勤に同行せず国内に残った経験が心の成長に大きく影響したと語った。「人生において幸運の種は万人に降り注いでいるが、それを掴めるのは情熱をもって挑戦する人である」と述べ、「努力の種まかねば夢の花は咲かない」という言葉を紹介し、「Just Try!とにかくやってみよう」と挑戦することの大切さを伝えた。

社会では「ご縁に感謝」、「一期一会」の心構えで人と向き合うこと、その縁をさらに広げ繋げるために自ら発信することが重要と述べた。また、「働くとはどういうことか」と問いかけ、生徒全員の発言に耳を傾けた後「自

分の価値を世に問う」そんな姿勢を持ち続けることが大切だという中尾哲雄氏の考えを紹介した。

人は環境に対応して「変わる」ことで生き延びてきたが、『変わる』という受動的な考えだけでなく、能動的に『変える』ことで、よりよい方向へ進むこともある。まさに『Just Try!』という気持ちで自ら『変える』ことにも挑戦してほしい」と説いた。

最後に、「人は『選択』によって成長する。人生には多くの選択場面があり、それぞれ覚悟をもって選択することで人は成長できる。『山を移す』という言葉のように、毎日少しずつでも努力を重ねていけば大きな成果につながる。」と述べ、生徒に「努力の大切さを信じて、これからいろいろなことに取り組んでほしい」とエールを送り講演を締めくくった。



高瀬 幸忠 氏

第10回 富山市立速星中学校

11月29日(金)、福崎秀樹氏(株)フクール代表取締役)が富山市立速星中学校で1学年293名に「A I 時代に生きるチカラを考える」と題して課外授業を行った。

福崎代表は、皆で対話して考えることを目的とし、はじめに社長のイメージを尋ねた。生徒からは「偉そう」「お金持ち」「頭がよさそう」と声が挙がり、「社長のイメージを覆したい」とメッセージを届けた。

自身が働く目的を「社員一人一人の人生を輝かせるため」と定義し、社員が幸せになるためにはIT・デジタル(必要なこと)と、人や組織(人間力)のどちらも大切だと語った。

続いて、4つの「今」と題して「思考が不要」「変化が激しい」「確かなものが何もない」「正解を誰も知らない」時代だと述べた。この100年の時代の変化を「5,000万人に普及するまで、電話は75年、ポケモンGOは1週間」と、電話と携帯アプリの具体例を挙げて説明した。これほど変化が激しい世の中では、既存の「正解」が通用せず、大人も何が正しいのか判断がつかない。子ども

や後輩に普遍的だと伝えていくことも限定され、必要であればネット検索で事足りる。そんな未来でどんな人が、どんな力が必要になるのか、生徒に迫った。

協働力や創造力など、人間だけが持っている力(人間力)を育むことが必要としたうえで、「正解はないが、少なくともスマートフォンからの情報だけでは人間力は高まらず、身体を使って自ら経験することが大切で、自分で考え決断して行動することの繰り返しが人生だ」と述べた。

最後に、今の中学生に「変化に敏感に対応しつつ、周囲の友達を大切に過ごしてほしい」と訴えた。社会的存在である人間として、協働的、周囲との助け合いの中に幸せを見つけて欲しいと想いを述べて、講演を締めくくった。



福崎 秀樹 氏

第11回 黒部市立石田小学校

1月20日(月)、横山栄一郎氏(横山冷蔵(株)代表取締役)が黒部市立石田小学校において、6学年26名に対し「アイス屋のおやじが伝えたいこと」と題して課外授業を行った。

横山代表は工場を着用するつなぎ・マスク姿で教室に入り、児童の関心をひきつけた。

はじめに自己紹介として、自身も石田小学校出身であることや、毎日食べているほどアイスクリームが好きで、子どもの頃からアイス屋になることが夢であったことなどを話した。アイスクリームの製造から店頭で並ぶまでの工程を説明するとともに、自社製品について児童に問いかけながら紹介した。また、アイスクリーム業界について、人口減少が進む中でも市場が拡大し続けていることなどを述べた。

続いて、社長就任時に企業理念を「私たちはアイスクリームを通じて幸せを提供します」に変更したことに触れ、幸せの形はそれぞれ違うが、従業員や顧客、地域の

方々の幸せを叶えられる会社でありたいという想いを熱く語った。「アイス屋になりたい」という夢は、アイス屋の社長になることがゴールではなく、誰かの役に立つことができたり、幸せにできるようになったりすることで本当の意味で達成されると自身の考えを述べた。

最後に、「今の学校生活やこれからの経験がすべて将来に繋がる。勉強や習い事など、今できることに一生懸命取り組むことは、選択肢を増やすことに繋がり、将来の幅が広がることは幸せなことだと思う。かけがえのない今を大事にしてほしい」と母校の児童にメッセージを送るとともに、自社のアイスクリームをサプライズで配り、児童を喜ばせた。



横山 栄一郎 氏

第12回 砺波市立庄川中学校

2月28日(金)、碓井一平氏(株就活ラジオ代表取締役)が砺波市立庄川中学校において、3学年34名に対し「どんな社会にも負けない人生をめざして」と題して課外授業を行った。

碓井代表は、キャリア教育の一環として母校で講演した際に「自分が何をできるかわからない」「社会に対して希望がない」といった後輩たちの悩みを聞いたことをきっかけに、自分も何かやらなければと奮起し、継いでいた会社を辞めて“学生と社会が繋がることができるような会社を作りたい”と起業した経緯を紹介した。「やりたいことが見つかったらすぐに行動し、お金や時間がなくても、それが上手くいってもいなくても、すべてが楽しく充実していた」と、自身の経験を述べた。

そして、海外に住んだ経験があったり、自分用のパソコンを持っていたりと同じ制服を着て同じ学校に通う生徒間でも、個人を取り巻く環境は異なることに触れ、「残酷かもしれないが、“世の中は平等ではない”という事

実を受け止め、今自分が置かれている状況を理解したうえで、どのような選択をするかということが今後の人生を左右する。様々な経験を積み、社会で戦えるだけのスキルを身に付けなければならない。

スキルを身に付けるには、あれこれ考えずやってみるチャレンジ精神が必要であり、そこに失敗はない」と語った。

最後に、「環境が人をつくる。与えられたものを享受するだけでなく、自分で選ぶこともできる。自分で自分の可能性に蓋をすることなく、自らの意思で行動し、努力を重ねることが重要。他人のものさしで自分をはからず、自分のものさしを見つけてほしい」とメッセージを送り講演を締めくくった。



碓井 一平 氏

「メタバースで考える教育の未来」

大橋聡司氏・キャリア教育推進委員会にて講演

5月17日(水)、大橋聡司氏（大高建設㈱取締役社長）が富山県キャリア教育推進委員会にて県立高校教諭約40名を対象に「メタバースで考える教育の未来」と題して講演とワークショップを行った。

大橋社長は冒頭、「急速な情報化や技術革新により社会が大きく変化しており、子どもたちの65%が将来、今は存在しない職業に就くと言われてい中、今までの常識に捉われたキャリア教育では間違った方向に進んでしまう可能性がある」と問題提起した。

続いて、生産性の低さを長時間労働で補うことによって世界第3位の経済大国に留まっている日本の現状を説明したうえで、「教員の長時間労働を是正しない限り、それを見て社会に出る子どもたちの価値観が変わらないため、生産性は向上しない。教える“価値”を変えていかなければならない」と説いた。

そして、これからの教育に求めるものとして、「日本人は失敗を否定的に捉えがちだが、失敗は成功につながるプロセス。失敗は悪いことではなく、失敗をどう生かすかが大事だと伝えてほしい」「法律は人がつくるもの。社会が大きく変化する

中、法整備が現実には追いつかないことがあるが、その時は道徳に基づいた判断が必要になる。子どもたちに“道徳”を身に付けさせることが大切」と語った。

次に、社員がやりがいを持って働ける魅力ある会社となるよう、大高建設ではSDGs、健康経営、業務効率化等、様々なことに取り組んでいると紹介。その取組みの1つであるメタバース事業について、「メタバースは社員からの提案で始めた。“社会貢献する”という企業理念に沿っていれば、私が理解できる範囲にこだわらずに取り組むこととしており、メタバースは今や当社が全国のトップランナーとなっている。教育にも活用できと思うので、興味があれば当社に声をかけてほしい」と語り、ワークショップに移った。

ワークショップでは、大高建設総務部の山本係長が、同社のメタバース事業を実演も交えながら紹介した。「メタバースは不可能を可能にするので、子どもたちの創造力を育むことができる。ぜひ教育現場でも活用してほしい」と熱く語り、ワークショップを締めくくった。



次世代を担う教員へのメッセージ

富山市中堅教諭等資質向上研修で講演

6月29日(木)、東澤善樹氏(とうざわ印刷工芸(株)取締役社長)、羽根敬喜氏(富美菊酒造(株)代表取締役)、牧真奈美氏(株)クルサー代表取締役)、遊道義則氏(株)ユニオンランチ取締役社長)の4氏が、経験年数11年目の教員58名を対象とした中堅教諭等資質向上研修(富山市教育委員会主催)にて「組織のリーダーとは」「若手の育成」をテーマに講演を行った。



＜東澤 善樹 氏＞

東澤社長は、はじめに、富山経済同友会を「自分のビジョンをどう実践していくかを語り合うことができる団体」と紹介した。そのために、①理想・夢を声に出して知ってもらう ②それを理解してもらうために説明をつくる ③意見をよく聞いて自分のビジョンに取り込む・組み込む この①～③が必要であると説いた。

さらに、東澤社長の考え方、行動の根本にあることについて「行動力基本動作10か条」を挙げた。「第1条 ぐずぐずと始めるな、時間厳守。行動5分前には所定の場所で仕事の準備と心の準備を整えて待機せよ」。「第10条 行動は命令者への結果報告によって完了する。やりっぱなしは何もしないよりまだ悪い。報告及び事後処理を完璧にやれ」。第1条は

何かに取りかかる前のこと、第10条は何かをし終えた後のことであり、取りかかる前の心持ちから、終えた後の報告に至るまでが重要であることを受講者に伝えた。

最後に、リーダーとしてもってきたい心持ちを自身の失敗談を例に語った。「上から目線でダメ出しして指示を出すようなリーダーは、今や求められていない。21世紀は相手に共感し、そっと背中を押すようなリーダーが理想視されている」と言われているが、「ダメ出し」をしてしまったとのことであった。下がってしまった従業員のモチベーションをどう上げるかは、受講者にとっても、身近な悩みとなっていたようである。東澤社長は、グループワークの中で、受講者の質問を受け止めながら、「事情を言える雰囲気をつくり、現在やっていること、これからやろうとしている未来形の話聞くことが大切である」とアドバイスし、講演を締めくくった。



＜羽根 敬喜 氏＞

羽根代表は、自己紹介の後、自社の創業年、従業員数、雇用形態による構成等を紹介し、学校という組織との類似性があることを話した。その話で受講者との距離が一気に縮まり、受講者は身を乗り出して話に吸い込まれていった。

次に、羽根代表が組織のリーダーとして普段から心がけていることとして、

- ・ 立場、処遇の違い、性別、年齢に関係なく、どの人と接する場合にも態度を人によって変えないようにしていること
- ・ 内部だけでなく外部の方と接する場合も出入り業者、お客様の取引の大小に関係なくできるだけ態度は一定にすること
- ・ 朝礼の際、指示や確認と同時に表情や声色で一人

一人の状況を把握するとともに日ごろから従業員とすれ違う際に声かけするようにしていること

を大切にしていると伝えた。

続けて、人材育成では、挨拶が基本であり、自然と人が集まり、よい人の輪・よい循環ができることや共用している場所や道具に気を配りきれいに整っていることがよい仕事(ものづくり)に大きく影響することを自らの経験等、具体的な事例を交え話した。

最後に、社会に出れば結果が求められ、困難や理不尽、うまくいかないこともあるが、結果にとらわれず、諦めずに一生懸命に真剣に物事に取り組むことの大切さを子どもたちに伝えてほしいと訴えた。そして、「教職というのはとても大変な仕事であるが、人づくりや人の成長にかかわるととても尊く、やりがいのある仕事であるので頑張っていてほしい」とエールを送り講演を締めくくった。



＜牧 真奈美 氏＞

牧代表はまず、介護サービス事業所「(有)ケア・サポートまき」を設立した経緯や事業内容を紹介した。また、

将来なくならないと予測される仕事を紹介し、それらの仕事には「コミュニケーション」「臨機応変」「クリエイティブ」なことが含まれており、それは介護や教育の現場で求められる資質や能力にも当てはまると説明した。

次に、自身の「コミュニケーション」についての失敗談を紹介した。将来を期待していたスタッフが辞める際に「牧さんにはついていけない。私は牧さんのように優秀ではない」と言われたが、それは誉め言葉ではなかった。しかし、自分を省みたときに、スタッフに「仕事を優先して当たり前、それくらいできて当たり前」という自分の価値観を押しつ

けていたことに気づいた。この失敗から「人は自分と同じ考え、価値観ではない」「『わかってくれるだろう』ではない。相手に伝わる言葉で伝える」「人は変えられない。変われるのは自分」ということを学んだと述べ、現在、牧代表が部下とのかかわり方で大切にしている、「部下と一方向ではない双方向の信頼関係をつくる」、「相手を変えようとするのではなく、まずは自分を変える」、「箱ではなく、風呂敷のような器になり、一つにまとめる」について紹介した。

後輩とのかかわり方に悩む受講者の話を聞いた牧代表は「11年目の先生方と1年目、2年目の先生方には見えているものが違う。その頃の自分はこういう気持ちであったか、何と声をかけてもらったら気持ちが楽になったかを考えてみるとよい。また、後輩の先生方が今の先生方と同じ立場に立ったときに、言葉の真意に気づいてくれる」と熱く語り、講演を締めくくった。



＜遊道 義則 氏＞

遊道社長は冒頭に「40分程度の研修で、受講者が変わるることなど絶対にない。しかし、変わるきっかけは、たった一言でも十分で、

大事なことは、受講者が「変わりたい」と思って生きているか、「変える」と思って生きているかである」と述べ、参加者に受講のきっかけとその目的を尋ね、参加者に「中堅であることの自覚」と「研修の意図を明確にすること」を促した。

そして、児童・生徒とのコミュニケーションについて、「コミュニケーションの前提」として、「私たちが反応するのは、相手の言葉を通じての自分の体験・想像であって現実ではない」、「すべての言動には肯定的な意図があり、私たちは常にそのとき可能な最善の選択をしている」、「私たちは省略と歪曲

と一般化で話をしている」、「自分のコミュニケーションの意味は自分が得た相手の反応である」と説明し、続けて、決して先入観を持たずにまずは事実を確認すること、意識して言葉の一つひとつを大事に使うこと、自分自身のコミュニケーションに責任をもつことが大切であると話した。

更に先生の本来の役割は「teaching」であるが、昨今はセラピーやカウンセリングの要素が加わり、ほぼ「coaching」の役割が求められている。特に児童・生徒に接する際には「承認する」ことが必要で、さらに「Be（在り方）」「Do（行動、言動）」「Have（結果、成果）」のどれに焦点を当てるかが重要であると説いた。そして、実はこの事は受講者自身の人生についても当てはまり、「先生方は今まさに、立ち止まって冷静に客観的に、『誰のために何のために自分がいるのか』を見つめる時だと思う」と話し、「先生方自身がコミュニケーションを楽しみ、素敵な人生を歩んで欲しい」とエールを送った。

「楽しく生きる」

稲葉伸一氏・富山県商業教育振興会定期総会にて講演

7月3日(月)、稲葉伸一氏(株三四五建築研究所代表取締役)が令和5年度富山県商業教育振興会定期総会・講演会において、県内商業科教員ら35名を対象に「楽しく生きる」と題して講演を行った。

稲葉代表ははじめに、自社で手掛けた事業を紹介しながら、建築士の仕事は「アタマの中にあるイメージを見えるカタチにする仕事」であり、現場でたくさんの人が競い合うことでよい仕事になり、よい仕事はより良い仕事に繋がると語った。

次に、「学校は“苗床”、企業は“畑”である。企業で花を咲かせて実をつけられるよう、学校は生徒を苗に育て上げて社会に出すような場であってほしい」と、教育を支える教員の力量や器としての学校の重要性を説いた。

そして、教員に求めることとして、

①挨拶の大切さ：第一印象は最初の2秒で決まり悪い印象を与えるとなかなかリカバリーできない。好印象を持たれるような挨拶することが大切だと子どもたちに教えてほしい。

②「いいからやれ」ではない：子どもたちが腑に落ちるよう、何のためにやるかを説明してほしい。

③好奇心を持ち続ける：世の中は川のようなもの。流れの中で何もしなければどこかに流されてしまう。流されないよう自分を動かす原動力となる好奇心を持ち続けてほしい。

④ゴールはない：そこにたどり着けばもう何もしなくてよいというゴールなどなく人生はずっと途中経過である。

⑤今が一番楽しい：人生には理不尽なことも多いが、身の周りの「良かったこと」を探し出すことで、「今が一番楽しい」と感じることができ、周りも楽しくなる。

と語った。

終わりに、「“人生は楽しい”と子どもたちに胸を張って言えるような先生になってほしい」と熱いメッセージを贈り、講演を締めくくった。



「働き方改革誰が進める？」

土屋誠氏が小・中・県立学校3年次校長研修会にて講演

7月27日(木)、土屋誠氏(日本海ガス(株)取締役社長)が小・中・県立学校3年次校長研修会(富山県教育委員会主催)にて、受講者35名を対象に、「働き方改革誰が進める？」と題して講演を行った。

土屋社長ははじめに、社長就任4年目である自身が校長3年目の受講者とはほぼ同じ立場にあると述べ、就任時は、ちょうどコロナ禍が始まったこともあり、重責に押しつぶされそうになったが、3年目には落ち着いて物事を考えられるようになったと語った。

次に、社会のシステムが複雑化し、コンプライアンス重視の風潮が高まる中、正確な業務運営・ルール順守のために業務量が増加し、また、競争が激化する中、高品質なサービスを提供するため絶え間ない努力が求められており、働く人の生活はゆとりがなくなっていると語った。

続けて、働き方改革のための自社の取り組みとして、①他流試合の推奨：社員が仕事以外で積極的に社外の人と関わることで成長し、企業の成長につながる、②ノー残業日を週2回設定、③毎日

の予定表を入力しチームで共有、④RPAの導入、を紹介した。

そのうえで、企業における働き方改革は、“社長を含めたリーダー”が進めるべきであり、リーダーは、自分の思いを部下に押し付けるのではなく、スタッフとコミュニケーションを取り、スタッフの声を傾聴し、スタッフがリーダーを信頼して取り組んでくれる環境を作らねばならないと説いた。

最後に、地域企業が抱える課題として、「企業の成長には人材育成が不可欠で、自社でも様々な人材育成策に取り組んでいるが、若手社員の“目標達成へのプロセスを自分で考える力”にやや物足りなさを感じる」と述べたうえで、教育現場へのお願いとして、「企業が求める人材は学校生活を経て育成されており、“目標達成に向けたプロセスを検討し実行すること”の大切さを学校生活の中で子どもたちに教えてほしい」と熱く語り講演を締めくくった。



次世代を担う教員へのメッセージ

～ 富山市中堅教諭等資質向上研修で講演 ～

8月22日(火)、伊東潤一郎氏(アイティオ(株)取締役社長)、村上宏康氏(株)ワプラス代表取締役)、茂住昌子氏(株)Snow Fox Japan代表取締役)、山野昌道氏(株)チューリップテレビ取締役社長)の4氏が、経験年数11年目の教員62名を対象とした中堅教諭等資質向上研修(富山市教育委員会主催)にて「組織のリーダーとは」「若手の育成」をテーマに講演を行った。



<伊東 潤一郎 氏>

伊東社長ははじめに、「人生を24時間に例えたら小中学生は夜中の3時頃。一日元気に過ごすための準備をする時間。小中学校の教員は、一日の準備をする子どもたちを日々相手にしていることを意識してほしい」と語り始めた。

次に、自社の企業理念を紹介しながら、「会社には必ず何を目指して働くのかを示した企業理念がある。学校も同様に目指す方向を打ち出すことが大切だが、今の学校は、目指す方向を教員、子どもたち共に理解していないのではないかと問題提起した。

さらに、会社が存在するためには、「CS：顧客

満足」「ES：社員満足」「SS：社会貢献」の3つの満足が必要であると説明したうえで、これを学校現場に置き換えた場合、「学校にとって顧客は誰か?」を受講者に尋ねた。受講者は、顧客は「子ども・保護者」と答えたが、伊東社長は、顧客は「社会」、仕事は人財の育成と考えることを提案した。そして、その場合、教師にとってのCSは、社会に貢献できる「人財(人に変化を与えることができる人)」を育成することであると説いた。

最後に、「現在、学校では問題に対して一つの答えを出すことを求める風潮がある。また、何か問題が起きても気づきや行動を起こさないことが増えている。気づきを得るためには、子どもの頃を思い出し、素直になること、何事にも好奇心をもつこと、自らの成長を意識することが必要」とアドバイスし、講演を締めくくった。



<村上 宏康 氏>

村上代表ははじめに受講者に富山県民の印象を尋ねた。受講者が「富山県人は保守的で謙虚で控えめ」と答えたところ、村上代表はそれを否定したうえで、若者たちにも夢はあるのに、「本音を言うとはぶかれる、想いを言うと叩かれる、夢を語ると笑われる」という環境が、若者たちに本音・思い・夢を語れなくさせてしまっているのだと語り、受講者に対し「夢を語れる環境をつくる」ことの大切さを訴えた。

次に、急速に変化している世界では、偏差値の高い学校に進学して大企業に進学しても必ずしも幸せにはなれない、自分がやりたいことを達成するために学び、自発的に行動することが欠かせないと説

明した。そして、夢を笑わず応援し、自分で考えて行動する若者たちを育てるためには、

- ・まず行動すること。大胆に行動し、進んで失敗して学ぶこと
- ・失敗を恐れず、何もしないことこそを恐れる気持ちをもってチャレンジすること

ができる社会や大人でなければならず、学校も例外ではないと強調した。

最後に、何かを始めるためには、「マインドセット(=アントレプレナーシップ。新しいことを創造しリスクに挑戦する姿勢)」と「仲間(=プランを基にした夢を応援し合える存在)」が大切であることを説いたうえで、「まず自分が変わらなければならない。矢印を自分に向けて振り返ることで気づきが生まれる。行動することで状況はよい方向に変化していく」と、一人一人が意識改革することの大切さを熱く説き、講演を終えた。



<茂住 昌子 氏>

茂住代表はまず、自分にあった場所を見つけるためにトライ＆エラーを恐れずに何度でも輝ける場所を探し続けることの大事さを語り、「海外に行くまでに

3回会社を変え、その中でプログラマーを経験したことが世の中の変革にいち早く気づく大きな一歩となった。15年間海外生活をした中で、北米の映画製作を通してIT業界と映像の目覚ましい発展の最先端に関わったことも会社を大きく成長させる上でキーとなった」と述べた。

次に、茂住代表が今、会社でスタッフに求めるスキルでもあり、今後ますます求められていくとしたのが、「AIに的確に指示を出すことができる人」であり、「今から5～10年後には私たちの想像もで

きないほどAIに頼る世界が広がり、利用する人間側の進化も同じスピードで求められている。そんな中、学校がAIとの共存方法を教えなければ、子どもたちは独学で学習し、良くも悪くも使いこなす方法は彼ら次第になる。教育現場にいる皆様が、まずChatGPTを無料体験してみて、どれほどAIが私たちの生活に役立つか、進化しているかを実感してほしい」と述べ、何らかの形で教育現場にAIと子供たちを繋ぐ正しい接点を設ける必要性を語った。

さらに、プログラミング的思考、問題解決と創造性、コミュニケーション力はAIを使いこなすには必須のスキルだが、グローバルな情報をより速く正確に得る為にも英語力の底上げが重要と説いた。

最後に茂住代表は「英語を話し、AIを使いこなし、プロジェクトを成功に導ける子どもたちを一人でも多く育てることが教育現場に求められている」と熱く語り講演を締めくくった。



<山野 昌道 氏>

山野社長ははじめに、「人生を幸せにする3つのコツ」として、「迷ったらやる」「人のせいにしなない」「何をやってもうまくいく」を紹介した。その後、教員と

して10年が経過した今、一度立ち止まり、企業が求める人材やあるべきリーダーの姿について知り、「社会に役立つ人材を育成するため、どう児童生徒に向き合うか」「自分はどんなリーダーになるか」を考えることが本研修のゴールであると示した。

次に、「企業が求める人材」について、低成長時代、AI社会等、現在の日本が置かれている環境から、協調性、真面目さ、精神的安定性等の「性格スキル」がカギになるとし、「チームプレイができる人」「未

来を切り拓ける人」「正しい倫理観をもった人」が求められており、「誠実さ、熱意、行動力」が企業の求める資質であると説明した。

続けて、「あるべきリーダーの姿」について、リーダーの形は千差万別であるが、求められるのは、やはり「誠実さ、熱意、行動力」であり、リーダーとして大切なことは、部下を育成することに喜びを感じる、愛情をもって部下を叱ったり、挑戦させたりすることであると、自身の経験も交えながら説いた。

最後に、「たくましく育てる」「未来は希望に溢れていると教える」「努力する素晴らしさを教える」を大切にして児童生徒を育成してほしいと話し、研修のゴールである「自分の願うリーダー像」を思い描くことができたかと受講者に問いかけた。そして、「中堅の自覚をもったリーダーになってほしい」と受講者にエールを送り、講演を締めくくった。

「組織におけるこれからの働き方」

稲田祐治氏が富山県教育委員会 県立学校校長研修会で講演

8月28日(月)、稲田祐治氏(株)ミライノ交通観光ラボ代表取締役)が県立学校校長研修会において、県立・私立学校長55名を対象に「組織におけるこれからの働き方」と題して講演を行った。

稲田代表は、冒頭、社会情勢と働き方の変遷について概観し、経済社会の変化に対応する形で企業が雇用管理や人材育成方針を変化させていった結果、職場では世代ごとに働き方や就業意識の差が生じていると指摘した。

次に、企業の働き方の現状について、労働時間や睡眠時間等のデータを用いて課題を洗い出し、ワーク・ライフ・バランスの観点から、男女間の生活時間のアンバランスの解消について提案を行った。

さらに稲田代表は、長時間労働の是正、柔軟な働き方がしやすい環境整備、子育て・介護等と仕事の両立や障害者の就労といったトピックを「管理者が取り組む課題」と位置づけ、長時間労働の是正のために①時間外労働の抑制②変形労働時間制の導入③フレックスタイム制の導入、柔軟な働き方がしやすい環境整備のために①テレワークの導入やIT等を使った合理的な仕事へのシフト

②ワーク・ライフ・バランスを促進する休暇制度③就業形態の導入支援に

よる多様な働き方の普及・促進、さらには④勤務時間インターバルの導入なども含めた労働時間の適正管理⑤総合的なハラスメント対策といった処方箋を紹介した。また、教育現場の特質や公立学校特有の課題についても触れながら、私立学校での勤務時間管理の例を挙げ、公立学校において実現可能な働き方改革のアイデアを提案した。

講演を通じて稲田代表は、管理者が自身の経験に縛られることなく、時代の変化と若い世代の価値観やニーズを酌み取りながら、同じスタンスで働き方改革に取り組むことの重要性を繰り返し指摘した。そして最後に、働き方改革を推進するためには組織と家庭双方の協力が不可欠であると呼びかけ、仕事のスリム化や学校のカリキュラムに合わせたベストな働き方の追究によって、教員とその家族のウェル・ビーイングが実現されることを期待していると述べ、講演を締めくくった。



「グローバル社会に必要な人財とは」

大橋聡司氏が富山県高等学校教頭会研究発表会で講演

11月9日(木)、大橋聡司氏(大高建設(株)取締役社長)が富山県高等学校教頭会研究発表会において、県内の高等学校教頭96名を対象に「グローバル社会に必要な人財とは《ローカルな会社社長の視点から》」と題して講演を行った。

大橋社長は、冒頭、「教育の衰退は社会の衰退につながる。教師のなり手不足が問題となっているが、教育が衰退しないためには、教師が憧れの職業でなければならず、多忙化する学校現場を変えていかねばならない」と述べた。

次に、自社について紹介した。黒部川の治水事業は、若者に敬遠されがちな山での泊りがけの仕事であるため、若者に選ばれる会社となるよう様々な取り組みを行っている。SDGsを経営の指針とすること、ICTによる技術革新、健康経営・ダイバーシティの推進、DX化による業務改善など、新しいことにチャレンジしており、「『やるかやらないか』ではなく、やってみて改善すべき。やってできないことはない」と挑戦することの大切さを強調した。

続いて、グローバル化が進み、日本の若者が世界の若者と共に生きる時代となる中、先進国のうち日本だけが賃金上昇しておらず、労働生産性が低いことをデータを用いて説明したうえで、「こ

の生産性の差は教育制度の違いにある」と各国の教育制度を紹介しながら語った。

さらに、学校の管理職・教頭である受講者にリーダーシップについて説いた。「リーダーシップは資質やカリスマ性とは関係がなく、『仕事』である」とするP.F.ドラッカーのリーダーシップ論を引用し、「リーダーたる皆さんは、仕事としてリーダーシップを発揮しなければならない。リーダーシップには、ビジョン型、コーチ型など様々な型がある。理想は、場面やメンバーに応じて様々に使い分けることだが、まずは自分に合う型を見つけてリーダーシップを発揮してほしい」と述べた。

最後に、高校生の社会参加に関する意識調査で「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」という問いに、肯定的に答えた生徒が米・中・韓は6割を超えているのに対し、日本は3割に留まることを紹介。「多くの高校生が『自分は社会を変えられる』と思えるようになる国になってほしい」と教育への期待を語り講演を締めくくった。





「ミドルリーダーとしての自覚、役割～働きやすい環境づくり～」 稲田祐治氏が富山県中堅教諭等資質向上研修で講演

11月22日(水)、稲田祐治氏（㈱ミライノ交通観光ラボ代表取締役）が、富山県中堅教諭等資質向上研修において、11年目の教員192名を対象に、「ミドルリーダーとしての自覚、役割～働きやすい環境づくり～」と題して講演を行った。

稲田代表ははじめに「これからの学校は、教員の資質向上と優秀な人材（教員）の確保が求められており、そのためには、教員が自己研鑽する時間や、公私共に充実した生活を送る余裕を持つことが必要であるが、現実には学校現場が多忙で実現できていない。教員を忙しさから解放しなければならない。」と課題提起した。

次に、これらの課題を解決するためには、①教員が授業や学級運営を中心とした子どもたちへの教育に専念できるような体制づくり、②学校教育活動が校長や教頭による全体統括の下、組織としての一体的な活動として行われること、③一部学校業務の外部委託などを検討すること、が必要

であるとし、このためには、今回の研修受講者である中堅教諭、ミドルリーダーの果たす役割が大きいと説いた。

そして、教員の年齢構成がいびつで、若い教員と年配の教員との間にギャップが生じている中、ミドルリーダーが、①メンター：同僚教職員の学びを支援、②マネジャー：課題解決に向けた協働体制の構築、③リーダー：経営ビジョンの共有化と実践化、の3つの役割を果たすことで、世代間の意思疎通やチーム化による学校運営に繋がると語った。

続いて、学校の労務管理について、文部科学省所管の公立学校と厚生労働省所管の私立学校を対比させながら問題点を指摘したうえで、学校の働き方改革推進のためには、国、教育委員会と学校、そして家庭の理解・支援・協力が不可欠であると述べた。

最後に、「ミドルリーダーである皆さんが中心となって、働きやすい環境づくりに取り組み、教職を魅力ある仕事にしていきましょう」とエールを送り講演を締めくくった。

中堅教員へのメッセージ

— 富山市中堅教諭等資質向上研修 —

6月25日(火)、荒井洋平氏(株宝来社代表取締役)、森弘吉氏(株エムダイヤ代表取締役)が、中堅教諭等資質向上研修「社会に学ぶ研修会」(富山市教育センター主催)において経験年数11年目の教員55名にオンラインで講演を行った。



<荒井 洋平 氏>

荒井代表ははじめに、創業当時の会社の歴史に触れ、ディスプレイ業や建設業を取り巻く環境について説明した。

建設・内装業界において、ハウスメーカーやゼネコンと比較して知名度が低いとされるディスプレイ業だが、現場の環境改善等により女性の割合が増えてきている。また、「施工管理職の採用と育成」は会社としても課題であり、設計職は学校でのプログラムもあり志望する学生が多いが、施工管理はあまり知られておらず、採用が難しいと話した。

続けて、建設業界を取り巻く環境として、勤務者の給与水準は他産業よりも高く、毎年賃金も

上がってきていることを示し、これから働く人にとって魅力は高まっているのではないかと語った。

また、若手の育成について、“自分らしさを大切に”、“承認欲求が強い”、“効率性を重視する”、“世界中の人とつながるフラットなコミュニケーション力”など、いわゆる「Z世代」の特徴を挙げ、「ベテラン管理職が若手社員とのコミュニケーションに難しさを感じていると思うこともあるが、若手社員はデジタルネイティブであり、新しく導入したITツールへの順応や資料作成等の業務が早いことが強み」と、若い世代の価値観・考え方が移り変わってきていることを示した。

最後に、「教員という職業は、環境的にも制度的にも変化に柔軟に対応する力が求められる大変な職業だが、かけがえのない必要な職業。ぜひがんばっていただきたい」と激励し、講演を締めくくった。



<森 弘吉 氏>

森代表はまず、自己紹介として自社の事業内容や取組みを紹介した。そして自身の経験を踏まえ、日頃心がけている考え方や価値観について、

教育と結びつけながら語り、受講者は話に引き込まれていった。

稲盛和夫氏の人が成功するための公式(成功=能力×熱意×考え方)を挙げ、会社や自身の考え方を正しい方向に向けることが大事であるとしたうえで、自身が心がけていることや考えていることとして、

- ・信頼関係を築くこと
- ・人との出会いやご縁を大切にすること
- ・時間管理のマトリックス
- ・変化への対応

を大切にしていると述べた。中でも、信頼は未来に向けて根柢なく頼ること、信用は過去の実績に基づき信じることであり、信頼される人であるよう心がけていると強調した。また、リーダーとしては、

・現状に甘んじない改革思考としっかりとした戦略性。それらを裏打ちする高い倫理観。「なすべきことをなす」という価値観

・伝えることと伝わることは違う。だからこそ何度も繰り返し、ぶれずに表現を変えながら、組織の考え方を伝えること

を心がけていると語った。

最後に、自身の子育て論を交えながら、教育に望むこととして、「知恵を使って過去に事例がないことに対して決断し、行動できる人を育ててほしい」「自己決定の機会を与え、自己責任で失敗した際には寛容であってほしい」「児童生徒が没頭するようなわくわくする経験をさせてほしい」と伝え講演を締めくくった。

中堅教員へのメッセージ

ー 富山市中堅教諭等資質向上研修 ー

令和6年7月29日(月)、益田貴司氏(ブリーズベリオペレーション3号(株)執行役)、吉村直樹氏(富山エフエム放送(株)取締役社長)が、中堅教諭等資質向上研修「社会に学ぶ研修会」(富山市教育センター主催)において経験年数11年目の教員54名にオンラインで講演を行った。



益田 貴司 氏

益田執行役は、まず、自身の経歴やBBHグループのホテル再生業の概要について話した。そして、BBHグループの使命(経営理念)である「顧客には、低価格ながら高品質な宿泊体験を享受してもらう」「社会には、新築とは違い、省資源で地球環境にやさしいホテル事業を広める」「自らには、高い収益性と他ホテルより安定的かつ良い金銭的待遇を獲得する」について説明した。続けて、コロナ禍前から現在の売り上げの推移を紹介しながら、回復傾向にあるが、コロナ禍前にはまだ戻っていないことやインバウンドの回復、北陸新幹線金沢敦賀間開業、黒部ダム的一般開放等のホテル業にとって明るい材料が出てきているといった今後の観光業やホテル業の見通しについて語った。



吉村 直樹 氏

吉村社長は始めに、FMとやまの概要・状況について、聴取習慣率のグラフを示しながら、午前7時台や午後5時台のドライバーズゾーンに聴取習慣率が高いこと、ラジオCMは商品名が印象に残ったり、信頼できると感じてもらえたりすることがラジオの強みであることを紹介した。一方、ラジオの年代別保有率について、60代は50%以上保有するが、20代では8%にとどまること、ラジオの広告費はピーク時の40%程度に低下していることが課題と述べた。続けて、仕事をする上で心がけていることや考えていることとして、

- ・面倒なことや難しいことはみんなやりたくはない。しかし、面倒な仕事や難しい仕事が自分の仕事であり、自分がやらないで誰がやるのだという気持ちを持ち、自分から逃げないようにしている。

そして、自身がマネジメントで心がけている「スタッフの名前と顔を覚える」「人のために働く」「気がつき、行動に移せる人を育てる」「問題をうやむやにしない」「成功するまでいろいろな方法を試す」という5つのことについて具体例を交えながら語った。「気がつき、行動に移せる人を育てる」に関して、アルバイト時代に、男性客の暗く悲しい顔が気になり、勇気を出して声をかけたことで、その男性を救うことになった経験が、ホテル業に就職するきっかけとなり、自身の信念となっていることを紹介した。

また、社会が求める人材として、「子どもの良いところ、特徴的なところを伸ばしてほしい」と話し、時代の流れに対応して活躍できる子どもたちを育むには、「教師も時代の流れに対応し、取捨選択の判断をしなければならない」と語った。

最後に、「なぜ、自分が教師になろうと思ったのか初心を忘れず、信念をもって業務に励んでほしい」と激励し、講演を締めくくった。

- ・ラジオ局の場合、制作サイドの利害関係者はリスナー、営業部にとってはスポンサー、総務部にとっては社員等、立場によって利害関係者は異なるため、全員を満足させるような判断はできない。時には、会社のために社員の思いとは違う判断をすることも必要。

- ・会社とは不条理なもの。日々理不尽なことがある。しかし、長い目で見れば、すべてが不条理や理不尽であることはない。

これら3点について、自身の体験談や失敗談を交えて語った。

また、学校教育において、「対人コミュニケーション能力の養成」「ストレス耐性(折れない心・粘り強さ)の獲得」「基礎学力や一般教養を身につける」ことを期待していると述べた。

最後に、会社や学校の中で不条理なこともあるが、不条理の先にやりがいや楽しいことがあるのも事実とした上で、「次世代を担う子どもたちを社会に送り出すにあたって、自信をもって教育してほしい」とエールを送った。

「企業経営と学校経営」

小・中・県立学校 3 年次校長研修会にて講演

令和6年7月29日(月)、高瀬幸忠氏(㈱スカイインテック顧問)が小・中・県立学校3年次校長研修会(富山県教育委員会主催)において、受講者42名を対象に「企業経営と学校経営」と題して講演を行った。

高瀬顧問はまず、「企業経営」について、①経営理念を実現する、②仕事を通じて社会に貢献する、③従業員の Well-being を高める、④利益を出す、という4つの視点から説明した。「経営理念を実現するためには、しっかりした基本理念が必要。コンプライアンスに則り、正直・誠実であること、社会の期待の上をいくこと、社会の一員であることを大事にしている。また、SDGs の取り組みを進めるためには、現世代の人たちの常識による思い込みが革新の邪魔をすることがあり、常識の壁を打ち破ることが必要である。そして、少しずつの努力が大きな成果を生み『山を移す』ことに繋がる。従業員の Well-being を高めるためには、自らの意識を変えることが大切である」と述べた。

続けて、障がい者雇用を通してマネジメント力や Well-being を高める

として、「合理的配慮」について、「障害があることで生じる困りごとの解消や軽減に向けて社会全体で必要な対応をする。健常者も同様であり、どんな優秀な人であっても、できること・できないことをきちんと聞く、言えるようにすることが必要である。仕事をしやすくするために『話せる場(聞く場)』をつくり、皆で理解し、支援する仕組みを大切にしている」と説明した。

最後に、企業における出資者や経営者、従業員等を学校に置き換えて考える中で、「企業における『顧客』は、学校においては『未来社会』に繋がっていくのではないかと問いかけた。そして、「これからは、企業における『エンドユーザー』が学校においては何になるのかを議論しながら教育活動を進めてほしい」と述べ、講演を締めくくった。



高瀬 幸忠 氏

「未来を担う高校生に伝えたいこと」

中・高進路指導研修会にて講演

令和6年8月28日(水)、田村元宏氏(㈱タムラ設計、代表取締役)が中・高進路指導研修会(富山県教育委員会・富山県高等学校進路指導研究会主催)において、高等学校及び特別支援学校学級担任65名を対象に「未来を担う高校生に伝えたいこと」と題して講演を行った。

田村代表は冒頭、「人は幸せになるために生まれてきた」と自身の考えを述べた。そして、幸せに生きるためには、①人のせいにせず、自立して自分の人生の主人公として生きること、②教えてもらうことに感謝し、その教えを発展させて後世に返すこと、③学び(成長) 続けることが必要だと語った。

次に、将来求められる力として、「心を整える力」「実践する力」「コミュニケーション力」を挙げた。そして、「コミュニケーションには、“動的なコミュニケーション(=積極的に話しかける)”と“静的なコミュニケーション(=あいさつ、マナー、服装、話し方、聴く姿勢)”があり、静的なコミュニケーションをしっかりと行うことができる人は相手から信頼を得ることができる。コミュ

ニケーション力という、一般的には誰とでもすぐ仲良くなれることを

イメージされるが、幸せになるために必要なコミュニケーション力は『人の話をよく聴くこと』であり、成功している人の多くは、謙虚で丁寧、相手の話をよく聴くという共通点がある」と説いた。

また、我々は100年に一度の環境変化の時代に生きているとしたうえで、「時代や環境の移り変わりによって生活スタイルや考え方が変化する一方で、普遍的な考え方もある。『感謝』『思いやり』『希望』は幸せに生きるためのすべての言動の原点だ」と語った。

最後に、「心は受けた言葉でできている。先生方も生徒と接する際は『感謝』『思いやり』『希望』の心をもって、いろんな言葉で伝えてほしい。そうすれば生徒たちはきっとこれらの心を持って成長するはず」と未来に期待を寄せて講演を締めくくった。



田村 元宏 氏

「ものづくり企業の人づくりと組織づくり」

富山県中学校長会研究大会において記念講演

令和6年11月6日(水)、伊東潤一郎氏（アイティオ㈱代表取締役社長）が富山県中学校長会研究大会において、県内全中学校長76名を対象に「ものづくり企業の人づくりと組織づくり」と題して講演を行った。

伊東社長はまず、自身が3月30日の早生まれであり、同学年の中でもあらゆる面で大きな差を感じた経験から、物事の違いや差を、和・差ではなく積や商で捉える、つまり1歳と2歳の差は1歳という捉え方ではなく、10歳と20歳の違いと同じであるという捉え方をする必要があると語った。

そして、ものづくりを行う上で重要な点として、「自社の金型を製作する上で求められる技術や品質、すなわち“製品形状の実現性”“製品形状の安定性”“段取り性”“ライフ”“メンテナンス”“価格”“安全性”の要素は、どれか1つでもゼロであれば全体がゼロになる。その結果、商品が売れずに次回から仕事がなくなってしまう。積算の視点で見ることの重要性を社員にも説いている」と

述べた。

また、子どもたちが生きていくために必要な力として、①人間力（優しさ・逞しさ）、②学力（知識・知恵）、③体力（健康・運動）の3つを挙げ、この3つも積であると述べた。続けて、「何か問題が起きたとき、本人が気付いた以上の行動はできない。『何かおかしい』という気付きと行動を促してほしい。気付くためには、“素直になる”“好奇心を持つ”“役を果たす”“好きになる・本気になる”“成長を意識する（変化する）”を意識した行動が大切である」と説いた。

最後に、「成功の反対は失敗ではない、何もしないことだ」「人生には与えたものが返ってくる」「与えられた課題は『先送り』できるが、『逃げ切る』ことは出来ない」という自身が大事にしている示唆に富んだ言葉を述べ講演を締めくくった。



伊東潤一郎氏



稲田祐治氏

「ミドルリーダーとしての自覚、役割～働きやすい環境づくり～」

富山県中堅教諭等資質向上研修にて講演

令和6年11月20日(水)、稲田祐治氏（㈱ミライノ交通観光ラボ代表取締役）が、富山県中堅教諭等資質向上研修において、11年目の教員196名を対象に、「ミドルリーダーとしての自覚、役割～働きやすい環境づくり～」と題して講演を行った。

稲田代表は「学校には、教員の資質向上と優秀な人材の確保が求められており、そのためには、教員が自己研鑽する時間や、充実した生活を送る余裕を持てるようにして教職の魅力を向上させる必要があるが、学校の負担増、授業以外の様々な業務があることなどから実現できていない。教員を多忙化から解放しなければならない。」と現状と課題を述べた。

これらの課題を解決するために、①適切な役割分担、外部人材の活用などによる教育に専念できる環境づくり、②教育活動が校長や教頭による全体統括の下、組織の一体的な活動として行われること、③業務の一部外部委託などを検討するこ

とが必要であるとし、ミドルリーダーが果たす役割の大きさを説いた。

ミドルリーダーとは、“戦略的役割を果たし得る教職員”を指し、①メンター（同僚教職員の学びを支援）、②マネージャー（課題解決に向けた協働体制の構築）、③リーダー（経営ビジョンの共有化・実践化）の3つの役割を果たすことで世代間・職制間に垣根を作らず、チーム化による学校経営に繋がると語った。

また、学校が取り組むべき課題として、ミドルリーダーの育成や教員の働き方改革を挙げ、改革に向けては男女の働き方の違いにも踏み込み、長時間労働の見直しや勤務時間の適正化、柔軟な働き方がしやすい環境づくりなどに取り組む必要性があり、国や教育委員会、家庭の支えが不可欠だと語った。

最後に、「今後の働き方が誰一人取り残さず、先生方や家族の皆さんのウェルビーイングにつながっていくことを期待する」と講演を締めくくった。

年 月 日

富山経済同友会 御中

(学校名)

(校長名)

課外授業講師の派遣依頼書

下記のとおり貴会から課外授業講師の派遣を依頼します。

区 分	希 望 内 容	備 考
講 師 名	[会社名] [役職・氏名]	
日 時	[時 期] 年 月 日 () [時間帯] : ~ :	第2希望 月 日 ()
対 象	[学年] [学級] [児童・生徒数] [会場]	
実施内容	[形式] 授業 / 講演 / その他 [テーマ・演題] [ねらい]	
連 絡 先	[所在地] 〒 [TEL] [FAX] [E-mail] [担当者職氏名]	
そ の 他 参考事項		

(注) 参考となる資料があれば、適宜添付してください。

富山経済同友会

〒930-0856 富山市牛島新町5-5 インテックビル4階

tel. (076) 444-0660 / fax. (076) 444-0661

ホームページ <https://www.doyukai.org/>